生活をいろどる　刺しゅう製品
san-ei
embroidery
サンエーシシュウ株式会社　／東京・大阪・上田

11月15日
（土曜日）
1969　季刊

うえだ

社団法人 上田高等学校同窓会関東支部会報

第2号
発行所
上田高等学校同窓会関東支部事務局
発行責任者　稲垣征夫
編集責任者　坂井実雄
埼玉県川口市並木町2－11－6
矢島鋳工㈱内
電話　0482－53－2662（代表）
題字は稲垣支部長筆

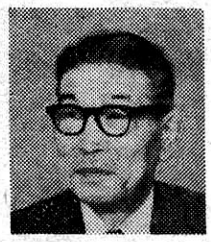
第八回関東支部大会盛大に終る

校歌寮歌の渦に湧く

六月十三日に行なわれた大会には、会員二百数十名の出席者と傍友同窓会役員並びに上田よりの来賓十数名の方々を仰ぎ、全員六紋銭の手拭を鉢巻きにしての校歌や応援歌の大合唱に進展し学生時代の気を満喫し盛大に終りました。

大会を顧みて——

支部長（14）稲垣征夫



私は支部長就任に当って四本の柱をうち立て、その実現に全力を尽す肚を決めた。

この大会には、肚の中で支部長としての凡てを堵していたが、幸いに盛会だったといわれるので、私もホットしている。

当日は生れて始めて経験する歯槽ノウロウで歯が痛くて堪らず、ただでさえ仏頂面の私が一層の仏頂面で、皆さんになんとも申訳ないと思っていたが、来賓の方々も会員の方々も幹事諸君の熟情に同調されて極めて楽しい一夕を過し得たことは、ほんとに感謝に堪えない。

竹内敬太郎先生に伺ったところ「まことに盛会で結構でした。この種会合で若い人の出る会は必ず発展する。当日は若い人がワンサとつめかけた。支部は今後益々発展するでしょう」とのお話だった。

第一の柱は会報「うえだ」を立派に育てることであるが、時間が無いにも拘らず坂井委員長をはじめ編集委員諸君の無茶苦茶の努力で創刊号は立派に誕生した。こんどの第二号は時間があるので立派なものが出来ると確信している。

第二の柱は、支部に関する限り「時代の断絶をなくそうということである。」年代こそ異っても、共にあの母校の古城の門に学んできた我々同窓生たちではないか。

終戦後の世界の変転極りない動きを見ていると、「歴史は人間が作るもの」であることに間違いはないが「歴史は自分の意思を持っている」雛がなにをしようと「われわが道を行く」と豪語しておるように思えてしかたがない。

年が少し違うと対話が困難になる、若い者の時代が急テンポで迫っている。年配者も負けてはいけない頑張れというのが、第二の柱をうち立てた根底に流れている私の気持ちだ。

幸いに幹事会においても、大会においても、老も若きも年令を超越して頑張ってくれて、老若をミックスした美味この上なきカクテルをのましてくれた。満場この美味に酔った。

至難と思はれた第二の柱にも希望が湧いた。これは大収穫だ。

第三の柱は支部と故郷との握手であるが、これも着々進んでおる。

第四の柱は夢のような支部会館を作ることであるが、その手初めとして、支部をここまでもってきた功労者矢島鋳工社長矢島五郎幹事長をはじめとする、同社の猛烈社員全員の献身的なご努力ご苦労に対しては、精神的なお礼をしようと計画を進めている。

最後に皆さんのご健康と、御多幸をお祈りする。

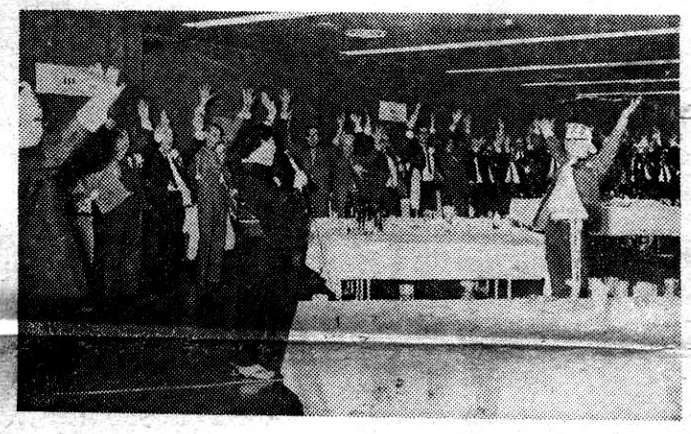
大会報告記

開会前景

晴天である。いよいよ第八回関東支部大会の当日だ、かけつけた会場には既に（20）柳沢先輩を始め受付幹事がズラット列んでいる真白なテーブルクロスがチカット目に強く映る、誰れもが上気ほほ笑んでいた。

例年のことながら、この受付と会計という役は実に御苦労な役目である。応接に暇なく満足に大会の前半はみられない、しかしひと言の不平もなく誠心つとめてくれる御役目には唯々感謝の念で一杯である。

本日病をおして受付につくしてくれた（33）十屋君の御尽力には来賓の応接



第八回関東支部大会風景

頭がさがった。来賓各位も次々と現われる。紅一点の珍客上田染谷丘高校同窓会、在藤会長さん達もみえられた。ツツイ菊花の記章がいにしえの美少女たちの胸に飾られる。受付、会計、会場係りからの伝令がとび交う、ザワメキの波がサロン一杯にみちみちてきた。ひときは高く（14）稲垣支部長の哄笑がきこえてくる、（21）島田（33）大森（28）坂井各副支部長の大童である。（40）小林（47）牧内（51）新井君等の会計幹事は、奥の院に鎮座ましまして、ゼニッコの勘定に汗ダクの大奮闘である、一番責任があって気苦労は本当にお気の毒千万な役、だが莞爾として精励の姿はまさに神様より今日だけは尊く有難く思えた。「そろそろ始めやせんか」（36）神野副幹事長の声だ「皆さんどうぞ会場へ入っておくんなすって」サロン一杯に神野君の声が続いてひびく。この美声（？）のトテツモない大号令が、人波を大移動させる。会場の舞台正面の壁に紫地の大応援旗がピンと飾られ、側面には六紋銭のこれも大きなのぼりが下っている。会報「うえだ」創刊号発行を記念して配られた日本手拭の幾つもが三方の壁に沢山飾られた。簡素な美が会場を色どる。同鉢巻和服姿で袴のもものぶちを高くとった往年の応援団長（55）町島君がかけよってくる「前景気をつけろ」神野君と私のケシカケで、得たりやと町島君の扇が上る、「校歌斉唱」瞬間、会場のザワメキがピタット止る、校歌のレコードに合せて「秋玲瓏の……」合唱だ、心なしか町島君がスパランク美少年に豹変した。「先輩これどうでこわす」（52）浜村君が待参した陣太鼓がゲット目の前につき出された「こりゃ傑作だ」「たたけ、たたけ」と声援がとぶ「よいしゃ」とたたいたら、「ドドドド・ドーン」と気持ちがいい、よくまあ気のついたサムライがいたもんだ。勤先の会社から借用の由、おとなしい浜村幹事にしては上出来、深謝申し上げる次第である。前景気は充分についた。来賓各位も全部揃って着席された。ここで開会と、司会の神野副幹事長に合図。

大会次第

開会の辞が温厚な（21）島田副支部長によって宣せられ、会場内に拍手の渦が起る。例によって挨拶に（14）稲垣支部長の豪快な抱負と幹事一同の苦心の努力及会報「うえだ」創刊編集委員一同の労苦を称える。

命なるかな、この本日の盛会を待たずして永眠された前支部長（7）故清水菊三天先輩と、本会顧問（8）故勝俣稔大先輩とのごめいふくを祈って、一同黙祈をささげた。瞬時、両先輩の在りし日の慈愛の面が浮ぶ。黙祈終り、会場は緊張から解放される。あらためて会員による校歌の合唱である。

「古城の門をいで入りて……」とその大合唱は少年の日の遠き日に我々を蘇えらせる。歌い終って我も友も一斉に感激の拍手である。師は尊くも有難く、また懐しきも、十有余年にわたり母校に教鞭をとられた恩師、萩原実、中村六男両先生方の御挨拶、在職の日の想い出と、今ここに相会したそのかみの教え子たちの立派な姿に、両先生の感激は大。そしてその御挨拶は拝聴する全同窓生に深い感銘を与えられた。小林母校学校長先生挨拶、一段と拍手が起る。教育に運動に母校の現況を披露、「先生頼みます」のかけ声も自然に上る。続いて（27）柳沢本部理事長挨拶、「支部大会は本部へのよき刺激、今後の御協力を願うや切と結ぶ。会場に和気満ちてしばしば歓酬盛ん。——さて、来賓の上田市長小山一平君が立つ、同期の友だちだが本日は大切なお客、「皆さんの故郷をそして人情の美しさを私はキット守りましょう、それがためにも在京同窓生の皆さん方の、ふるさとに対する御協力を切に望みたい」最後をうまくまとめ上げたは流石。「市長ガンバレ」の声援がとぶ。特別来賓ともいうべき傍友高校の松本深志高校同窓会小池会長、松商学園同窓会の望月会長、古沢副会長、そして染谷丘の佐藤同窓会長さん方が前後して祝辞に立つ、「志気盛んな貴同窓大会がうらやましい」と小池氏。「東の上田、南の松本、同窓会を通じて今後ともよろしく」松商同窓会代表の上田礼贈の辞。佐藤染谷丘同窓会長が「こんなにデッカイ記章をつけてもらって、おらショウシくって……」とまさに抱腹酒脱な挨拶——。ポンポンとビールが景気よくぬかれ一大交歓の宴が続く。全員六紋銭の同鉢巻で凱歌、応援、寮歌の大合唱をくりかえす。柔和会の昔日の若武者たちが壇上でガナれば、野球部競技部のOBたちが我等遅れじとまた壇上を占拠する。爆笑が渦となり感激が若き血潮をよび戻す。盛んなるかな関東支部大会！

本日最年長の（8）松島大先輩のことばあり、若き期の林、（63）小田岡君の元気汪溢な感激の代表挨拶。大きく一同肩を組み会場一杯に大円陣をつくり、「信濃の国」の合唱となる。欲いまだつきざるもこの感激を胸に、閉会を（28）坂井副支部長にお願いする。ここに第八回大会無事終了。よき日にであり、よき団欒の会合なりき。明春もまたと誓いつつ万才に終り、解散する。

（幹事長（31）矢島五郎）

六紋銭と真田氏

第一回卒　小泉清見

幸村公画像

上田高等学校同窓会関東支部、なすとにおかれては如何なる構想に基いて六紋銭の標識を掲げられたのか老耄の私には何度出来ませんが極めて意義深く尊く感ずるものであります。よってこの六紋銭の紋所について述べることを御許し下さい。

源平盛衰記に、平家追撃の源氏の大将海野氏が備中水島の戦において戦捷の夕陽輝く波面に六の渦巻に、すはま紋白地に日の丸の紋を認め大旗真先に進ませられ云々とあり。（後証を待つ）

なりと即ち海野氏の家紋と一、東部町和深井、深井氏は表紋六文銭裏紋雁金紋。

一、松代町、旧松代藩士所蔵真田幸隆、昌幸、幸村三公の画像は皆六文銭を用いている。

真田氏は真田町長村に起った海野氏末裔の豪族である。

創りの古い学校程その学校の特色を積み重ねここに伝統を作るのである。上田には明治十二年日に上田中学校が設立されているから栄積重ねられた伝統があったにちがいないが、只明確

小泉氏近影

なことは、すでに八年真田氏上田藩城三百五十年祭が挙行せられた。この真田氏は幸隆、昌幸、信之、幸村四代四十余年間小県地方を領有し善民の情おのづから緻密であった、さるが故に真田魂の基が成立したのであろう。この真田魂が上中魂と変容したのであろうと老生は愚考している。

旧制上中第八代甲田作衛校長（一回卒）は上中魂の核心は「節義理念」の偉人傑士の信繋（幸村）公であるとして、六文銭の祈願四方の大旗に、されず八年真田氏上田藩城三百五十年祭が挙行せられた。この真田氏は幸隆、昌幸、信之、幸村四代四十余年間小県地方を領有し善民の情おのづから緻密であった、さるが故に真田魂の基が成立したのであろう。この真田魂が上中魂と変容したのであろうと老生は愚考している。

旧制上中第八代甲田作衛校長（一回卒）は上中魂の核心は「節義理念」の偉人傑士の信繋（幸村）公であるとして、六文銭の祈願四方の大旗に、りと熟慮決断された。それにより幸村公討死の慶長二十年（元和元年）五月五日を上中の記念日と定め爾来前日より翌朝まで野外発火演習を行い午後真田氏記念講演会を開催された。

関東支部創刊号に六文銭を掲げられたことを敬仰致します。

（母校元教諭）

故郷のいでゆ　別所温泉へ！
塩田局（026394）

花屋　電話　三一三一
南条　電話　二八〇〇
中松屋　電話　三一二三
つるや　電話　三〇〇八
玉屋　電話　三〇一五
ホテルたけや　電話　二八二八
柏屋本店　電話　三〇二一
上松屋　電話　二三〇〇
柏屋別荘　電話　二三四五
和泉屋　電話　三〇三〇
アサヒホテル　電話　二三三二

染谷丘だより

上田染谷丘高等学校長　宮脇昌三

去る五月下旬に、御会の稲垣征夫、矢島五郎、花岡椿の諸氏が、本校東京同窓会の佐藤学（松苑）女史のご案内で、材木町の染谷丘高校に見えられました。

稲垣支部長さんいわく「この学校に来たのは、生まれてから始めてだ。今日は堂々と正門から入ってきた。」

矢島氏「ぼくは、中学のときちょいちょい、運動会などのぞき見したものだ」稲垣氏（すかさず）「君は不良少年だったな。」—というようなやりとりがあって楽しい一刻を持った。よくこそおいで下さったと歓迎申しあげたことでありました。

明治四十三年、上田女子師範に予定の校舎校域をそのまま譲りうけて、「染屋の学校」と呼ばれて実に六十年近く　延べ一万七千名の卒業生を送り出した旧校舎の最後を見て頂いたわけでありました。

本校は、かくして、九月五日から移転を始め、太郎山の麓、大字西丘の地に新たなる上田染谷丘高校の歴史の一頁を記し始めました。

上田高校も、市役所も、信大繊維学部も、すべて市内を一望のもとに俯瞰し、遠く塩田、青木平を見はるかす高爽景観の地でありますが。

本年は、かような移動の年でありますので、例年の染谷祭も七月中下旬に営み、九月十日、長年馴染の地において全校訣別の式を挙げて、新天地へと忘したのであります。

はしげやし太郎山のふもと
ゆゆしき名に立つ古城のほとり
染谷の丘に地を占めて
星霜ここに六十八年
年輪重き学び舎（や）に
いま別れんとす
思ひをこめて
乙女らが踏みならしけむとも
りくの池の水草（みぐさ）も
年長（た）けにけり
幾千の乙女の踏みし校庭の土
の一くれもなつかしからずや
太郎山の雲晴れわたり乙女ら
の行くなる丘に日は足らした
り

旧校舎への愛情、離別に寄せる一端でありました。

東京（関東）における両会の親睦を寿ぎ、今回は染谷丘高移転のことを記して、消息にかえます。

昭七雑感

—上中31会—

柳　達雄（31）

昭和七年三月懐しの母校上中を巣立ったのが吾等三十一期生、人生の齢は五十五と六円熟した思慮と過ちの無い分別盛り、本来ならば社会的に何かと中心になって働かねばならない年代だと思うにつけ、関東大会などに他の期に負けぬ様な出席率にしようと奔走するのだが結果がいつも芳しくなく時々先輩諸賢からお叱めの言葉を頂く。しかし後輩の若い人達から慕われるのは同期の矢島君が幹事長として実によく献身的な活動のお陰であり、またまた先日の幹事会で稲垣支部長さんから矢島君表彰の話が出て、同席した土屋君と二人で感激した次第ですが事実矢島君が関東支部にかける情熱は非常なもので、我期の会長をやっておっては支部の仕事に支障をきたすというので会長を辞した位である。

さて少々会の内部活動をご紹介しましょう毎年春秋には必ず会を持ち、その上夏には矢島、宮坂両君の世話役でビール飲み会をやりその上矢島君の海の家まで泊りに押しかける始末、恩師では今は亡き英語の小林幹先生には生前ほとんど欠かさずご出席願いました。渋川にお住いの利根商高の校長さんの、上中時代国漢の松岡重三郎先生に憂路をご上京願ったり生物の横沢のご隠居さんにわざわざ上田から御出を願ったりしたこともありまして、童心の昔にかえって懐旧談に時を忘れるといった有様でした。

次に自慢話も少々書かせて下さいい。小宮山君が東京駅長になってパット肩身の広い思いをし、郷里へ帰れば上田市長が小山君といった具合、師の衛生局に宮入秀夫博士が特異な存在で通張ってくれていますが。この人のお父さんは上中第一代の同窓会長の宮入伝平先生です。幹事の宮坂三吉君の経営する会社の製品真空装置の機械は韓国、台湾は申すに及ばず、広く南洋への販路を持ち国際的ですが大部手前味噌になりましたがお許し下さい。（柳文堂社長）

何が何でも入部しろ！

柔道部の思い出

柳沢　広（44）

大きな希望と不安を胸に私が上田中学へ入学したのは昭和十四年である。その私に待っていたのは「柔道部へ入部せよ」との先輩の勧誘であった。柔道部入りを決心するまでの一週間、連日、柔道場へ呼び出され、時にはおどかされ、また時にはおだてられて返答を迫られた。「入部するのだ」「だめです」「きさまは柔道を学ぶのだ」「通学に時間がかかりますので」「そんなことは関係ない。何が何でも入部しろ」と、ついに柔道部へはいることになった。

当時、私をおどし、おだてたのは、名マネジャーと評判の高かった小林郷司先輩であった。（現在当支部会計監事、公認会計士、小林郷司事務所長）。入部し、それからというものは、依田先生をはじめ小林先輩を中心とする五年生から柔和の精神を徹底的に入れられたものである。小林先輩などが卒業されると、次に、古屋先輩（現東大教授）、などに引き継がれ、きたえられた。そのあとに続くは横田先輩（現下谷税務所課長）などで、それぞれにご指導を受けながらわれわれはたくましく成長し、全国制覇を夢見たのであった。

横田先輩の同期には長井先輩がおられた。昭和十七年の夏休み海軍兵学校から帰省された長井先輩に稽古をつけていただいたのである。長井先輩とは肩をだき合って別れたが、その後、先輩は南方の海で戦死されたと聞き、感無量のものがある。年うつり、戦後も十数年を経た東京の街角で、兄事した小林郷司先輩にばったりお会いした時の感激は筆舌ではとても表わしえないものがある。

剛よく柔、の小林先輩とはその後公私にわたり当時の名マネジャーと二部員との関係を越えて、ご指導を受けて今日に至っている。

「骨折一は俺だ」

私は二年生の時、五年生と稽古中、足を骨折した。例によって、安藤病院のお世話になったのだが時折り、お見舞くださった依田先生は「キミ、一度ぐらいの骨折で柔道を止めなどと気を弱くしてはいかん」と励まされた。

その時印象に残った先生のお言葉に「開校以来、骨折したのはキミが一番目だ。一番目の先輩がいるのだヨ」といわれたとこである東京柔和会の席上、その話を披露に及ぶと「その一号は俺だ」と名乗られたのがご存知小林運美大先輩で、以前からご高名は承わっていたが、その時以来いちだんと上中柔道部のアセ臭い先輩として身近に感じているしだいである。

「あのキミはネー」

依田誠先生は部員ひとりひとりの記憶を実に強くもたれている。朝な夕なの道場で、先輩部員の名札の掛けてある下へ級員を集められ、在校中のこと、現在活躍中のことなどを、「あのキミはネー」と楽しげによく話してくださったわれわれ一同はまだ一度もお会いしたことのない大先輩の英姿を先生の話しを通じて、おぼろげながらも輪郭をつかみ、範として、いっそう鍛錬精進した。幾星霜。東京柔和会の会合で依田先生の「あのキミはネー」の「あのキミ」にお会いできた。先輩諸兄は、まさに少年の頃、道場で先生からお名前づけを伺い、そして私たちが想像したとおりの大先輩たちであって感激も大きなものであった。

「最後の弟子」

依田先生が柔和会の席上、私を紹介してくださるとき「このキミは僕の最後の弟子なんだヨ」といつもおっしゃられる。嬉しく、面映ゆい、一瞬である。

ことしの三月、東京柔和会の会長稲垣大先輩（上田高校同窓会関東支部長）の的確なご指導のもと依田先生の設立を記念し柔和会員他の志をもって先生の胸像の除幕式が行なわれた。最後の弟子として私も、恩返しはこの時とばかり微力を尽くしたものである。後日同じ「最後の弟子」である星野賢三君（現上野高校教諭）と話し合った。

「教育とは、師弟、先輩後輩の柔和の精神によるつながりである。最後の弟子であるわれわれもがっちり先輩の後に続こう」と—。

依田先生はいま、千曲河畔、上田諏訪形のご自宅で悠々自適、ますますご健康であられる。

碓氷の山はきょうもまた紅葉して秋の訪れを告げている。

（蜂井沢にて）

〈掲示板〉

次号発行予定は、明春四月中旬

—◇—◇—

投稿歓迎＝明年二月末までに（但し九百字以内）

—◇—◇—

広告申込みも大歓迎（詳細は事務局へ）

—◇—◇—

年会費未納の方は、お早めに会計幹事の方へお払い込み下さい。

—関東支部会報—

「うえだ」に寄せて

東京岳南会　会長　井出一太郎

「岳南会」というのは私共の母校野沢北高等学校同窓会の名称であり、会長は先輩の黒沢富次郎元代議士であります。私は東京支部（東京岳南会）のお世話役をここ十数年致して参つて居ります。昔の野沢中学校は明治三十四年に、上田中学校野沢分校として発足致しました。開校は上田におくれること三年でありまして、私の在学した大正末年の頃は「県立上田中学校野沢分校」という焼印を押した椅子、机が使われて居りました。従つて貴上田高校とは文字通りの兄弟関係にあり、東信地方の教学を二分したともいうべき深い因縁があるのであります。

この頃私の知人のお祝の会合が上田高校同窓会館に開かれて出席致しました。大変立派な建物が出来上つて、同窓生諸氏が何かにつけて利用されている様子を拝見して、大変うらやましく存じました。その際上田高校正門の前を通り、葦古の色あふれたたたずまいに昔を偲ぶの情しきりなるものがありました。かつて上中、野中の対校マッチといえば、必ずこの校門をくぐつて野球や陸上競技を相きそつたものでありました。

今回貴校の同窓会関東支部が一層充実強化せられ、機関誌の発行が実現致しましたことも御同慶の至りにたえません。私の方もそうですが、卒業生の大半が東京周辺に集中している現在東京に於て開かれる会合の方がども拝見致しました。勝俣先生とは衆議院で議席を共にした間柄です。幾度か選挙を戦ったわけですが、この大人とはお互に褒め合って、当落を争うという気分ではありませんでした。氏の先代が私の郷里臼田町の出身母校中心のそれよりもはるかに盛大となりつつあるように拝察致します。先日矢島さんから「うえだ」創刊号をお送りいただいて一読しました。

いまは亡き勝俣、清水両先輩のことや稲垣支部長の御挨拶などは拝見致しました。

であるのも一つの因縁でありましょう。清水中将は千住の陸軍製織所長の時にお知合となり、戦時中私が南方で醸造を企画した時大変お世話になりました。退役后拙宅へ来遊された時の句

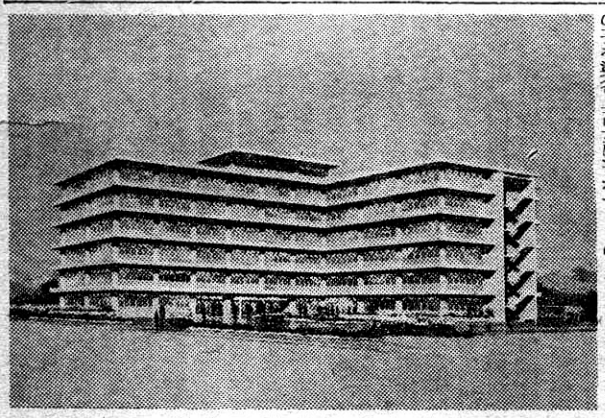
菊咲かせ清流引いて栄えたり
葦鶏頭一本ものになりけり　清山

稲垣さんとは昭和十四年氏が満洲国興農部次長の時にお訪ねして以来であり、その後知事候補にかつぎ出して御迷惑をお掛けしたことも忘れられません。小林俊直現校長先生は前任が野沢北高校であり、この辺も正に兄弟校たる御縁が深い訳です。

このように書いて参ります上田御出身の各位といろいろな意味で大変交流が多いことが感じられます。私の場合は、東信全体が第二区という同一選挙区になっているせいもあるか知れません。なにか他人事でない懐しい気分で本稿の筆をとりました。貴同窓会の御発展を心から祈念いたしますと共に、会報がその役割を十分果されますよう希ってやみません。

染谷丘の思い出

荻原貞雄（14）



戦争中私は大蔵省と陸軍造兵廠を兼務して居ったので、杉並の我家を顧る余裕がなく、家族を郷里丸子町東内に疎開させ、上の女子供一人は東内小学校に転校させて自分一人東京に残って、軍施設の疎開を計画し地下施設の適地と遊休工場とを全国的に探し回った。その際丸子町の鐘紡工場も視察したが会社との協議で富山県小杉工場に疎開した。丸子、屋代、松代等の山々を踏査したが適地がなく栃木県唐沼と山形県天竜に地下工場を企画したが、完成を見ずに終戦となった。

その当時、丸子電鉄で丸子から上田東駅に降るので駅近くにある染谷丘高女は印象的であった。今度染谷丘高校を郊外に移転してその跡に長野県庁の出先機関を集約して上田合同庁舎を建設する事になったので、県に懇請して、私が実施設計の委託を受けて今夏設計を完了した。工事の方は東信土建・関東電気工事、中川電気・第一設備・日新工業等五社の手に依って施工中であって、昭和四十六年春には竣工の予定である。

上田合同庁舎は、鉄筋コンクリート造地下一階地上六階延床面積六、八〇七平方米で、暖冷房空調設備の外、昇降機自家発電機まで完備した。近代建築である。内には上小地方事務所、上田保健所、上田建設事務所、東信事務所、東信労政事務所、東信綜合開発事務所、上小家畜保健衛生所、上小農業改良普及所、上小病害虫防除所、小県町村会等等の県出先機関を一棟に統合して地方民の利便を計った一大建築である。思出の地上田染谷丘に斯様な作品を残し得たのは県当局と同窓知友の御厚意の賜物を信じ感謝して居る。（荻原建築事務所社長）

（写真は上田合同庁舎透視図）

建築設計監理
株式会社　荻原建築事務所
代表取締役　1級建築士　荻原　貞雄（14回）
取締役　1級建築士　原田　米蔵
取締役　1級建築士工学博士　重倉　祐光
取締役　1級建築士　伊賀上博志
取締役　1級建築士　深野木　昇
東京都杉並区阿佐谷南　1—46—12　荻原ビル3階
電話　311—5085
上田出張所上田市鷹匠町　電話　上田2—4153

精密歯車装置設計製作
精密機械仕上加工及組立
若葉精密工業株式会社
取締役社長　土屋　学（31回）
専務取締役　土屋　博（47回）
取締役　土屋　孝（44回）
東京都目黒区八雲2—8—5
電話(717)1347・6050

在郷同窓会員諸氏へ

—同期の友への手紙—

副支部長　(21)　島田次郎

その後、ご無沙汰いたしました。お送りしました関東支部会報「うえだ」をご覧いただけたでしょうか。

今度第二号が出るので、編集部から懇記のような懇名を与えられましたので、貴兄宛の手紙を差上げてその責を果すことにしました

昨年は、いわば同窓会づいたといいましょうか、二回上田を訪れました。一回目は、わたくしどもの別の在京の上中会（21・22・23・24期の有志）とともに相応する在郷の同窓との合同懇親会のためでした。その節は大へんお世話になりました。二回目は十一月十日に開催された上田高校同窓会総会へ、当時の支部長清水菊三氏の厳命により、支部を代表しての出席のためでした。総会では同期の池田英雄　山浦厚の両君に遇い、懇親会では大先輩の峯村国一氏（8前支部顧問、故勝俣稔氏と同期）に何十年振りかでお目にかかり、まことにお元気なお姿に接しお喜びを述べた次第です。

一つの提案ですが、わたくしどもの在京の大士会（大正十一年卒）と在郷の二二会（21期）も年一回位はお互に合同同窓会を開らきませんか。近頃は列車も速くなって、上田上野間も急行で二時間半か三時間で行けますね。何んとか実現させたいものです。

また、支部の総会は毎年六月頃開催されますが、その時本部からは柳沢理事長、小林校長、竹内先生のお三方が万難を排してご出席下さいまして、いつも感謝しておりますが、これに対応して本部の総会にも支部の役員が参加する努力が払われてきました。二二会の諸君におかれても、来年の支部総会には大挙してご出席願えれば幸です。もし、できなければ、大士会としては貴兄を代表としてご招待申上げたいと思います。

支部会報もできましたので、貴会の動静をお知らせ下さい、紙面の許すかぎり掲載したいと思います。何分にも現在では年二回発行の予定ですので紙面にゆとりがないと思いますが、やがては在郷各期代表の声を載せていただくようになるでしょう。

末筆ながら二二会の諸君によろしく。

昭和四十四年十月二日

上田における「ふるさとの歌まつり」放映の日に

上中大士会　島田次郎

上中二二会　山口定次郎兄

第八回支部大会に

——お招きをうけて——

上田高等学校長　小林俊直

「先輩後輩が一堂に会して若き日の感激にひたる。楽しく明るく愉快にすごして……それが同窓会というものぢゃごわせんか。とにかくたのしくすごしやしょう」。この親愛感溢れた呼びかけに「そうでごわす。わしも行きやす、たのしくやりやしょう」。と関東一円から馳せ参じた二百数十名に上る同窓の皆さん。ほんとうに大盛会でした。同門に学んだというただ一つの事実を縁として一切のよそ行きのあいさつを抜きにして十年来の旧知の如く溶け合って、語り、歌い、だべる。同窓というものは世にも不思議な存在だと思います。今日齢不惑を越えてなお迷い悩むのが人生。そして明日がどのように来、未来がどのように展開するか、だれもが明確な展望を持ち合わせない激動の時代に、生きることの意味を今期の一夕は教えてくれました。

校歌・凱歌、応援歌と引ききりなしの大合唱。みんな上田城頭の若き〝ドデガラス〟に帰えって思い切り蛮声を張り上げ、がなりたてる。町島君の応援団長姿。その指揮振りの見事さ。陣太鼓は若き日の勝利のよろこび、敗戦のくやしさの日をまざまざと蘇えらしてくれる。

来賓の染谷の佐藤先生の方言を駆使してのお話。これは至妙であり、隠し芸とは正にかくあるべきものと思いました。言葉につながる故郷。しみじみと思い出しました。こうした楽しいよき大会に招かれた喜びをかみしめながら、ふと私は「お前は後輩の教育に全力投球していると言い切る自信があるかと」と自問し、じくじたる思いに襲われました。

今日大学紛争—隣りの火事—の火粉をまともにかぶっているのは他ならぬ高校だと思います。上田高校では大学紛争に一人の無関心者もいないと思います。私は生徒と語る度毎につくづくこのことを痛感します。この時代の激流の中に放り投げ込まれている若い生徒の一人一人の生命をどのように大切に守り育てて行くか。私など馬鹿に鞭打ちつつ努めているつもりですが、浅学非才を思い知らされています。皆さんの叱咤激励をお願いし、併せて一層のご発展を祈っています。

川西同志会の想い出

(13)　馬場友義

今は昔、遥かに遠い明治時代の頃である。当時塩田方面（別所・西塩田、中塩田、東塩田、富士山の各村）と浦野方面（青木、浦里・室賀・泉田、川辺の各村）との川西地方より上田中学へ通学するには乗物がなかったので何れも二里及至三里の道を徒歩で上田橋を渡って上田中学へ通学したものである。確か明治四十年前後と思うが別所街道から三角（川辺村赤坂）で二線へ出て通学する塩田方面の中学生と直接二線路を通って通学する浦野方面の中学生とは通学路の関係から非常に仲が悪く常に喧嘩の絶間がないので、何とか両者の間の融和を図ろうとして峰村国一（富士山村出身第八期）宮沢峰嘉（西塩田村出身第八期）小林家平（青木村出身第七期）石井林次郎（室賀村出身第七期）等の諸先輩が発起人となり塩田方面及び浦野方面より上田橋を渡って上田中学へ通学する中学生の全部を会員とする親睦団体「川西同志会」を結成した。

川西同志会は毎月一回（土曜日の午後）例会を開き会場には川辺小学校や城下小学校の校舎を使用することとした。私が川西同志会長（中学四年と中学五年の二回）となった時川辺村神畑の御寺を常会場とし寺の玄関に川西同志会の標札を掲げた。毎年三月には別所村安楽寺で卒業会員の送別会を開催するを例とした。最盛時には会員百余名以上に達し、上田中学通学生の一大集団を形成するに至った。

私は大正三年上田中学を卒業したのでその後の川西同志会の消長については何等知る由もなかったが川西地方の別所街道・二線路に電車が通るようになってから、上田中学生の大部分は電車通学をするようになり、徒歩で上田橋を渡って通学する中学生が殆んど皆無となったので自然川西同志会の存在の意義がなくなった、大正年間の末期には川西同志会も解散したことと思う。以上は私の若き血の燃ゆる青春時代の想い出の一駒である。

（信和紡績会長）

ハンドボールOB会

東京支部ここにあり

東京支部長　(48)　牧内清

昭和十二年七月号の列車時刻表を、秋葉原の交通博物館で見出した。私が上田中学校を卒業した年のものである。

その頃の信越線のダイヤをみると、上野行の列車は日に十二本、急行は金沢始発、上田を深夜に通るものが唯一で、他は全部が普通列車である。普通列車で一番速いのは、上田発十四時二十九分、途中の小駅はとばして、十八時五八分に上野に着く列車である。今の快速列車に当る。また、上田始発が一本あり、朝の五時十四分に発って、十時二五分に上野に着いている。この二つは便利な列車で、利用した記憶をお持ちの方が少なくないと思います。

料金は、上田—上野間二円五四銭であった。現在は、運賃が八〇〇円、急行料金が二〇〇円であるから、運賃だけなら当時の三二倍、急行料金を含めると四〇〇倍である。なお当時の急行料金は六五銭であったが、上田では殆んど利用の価値がなかったであろう。

この十月の国鉄ダイヤの改正で信越線の上野行列車は、上田を通るものだけで日に二〇本もある。しかもその大部分は急行又は特急で、普通列車は僅か二本しかない。上野までの所要時間は、特急の速いのが二時間二七分、急行が三時間前後であるから、平均五時間以上もかかった往時に比べると今昔の感である。

将来の話としては、「北回り新幹線」というのがある。東京を起点とし、高崎線の西を通って佐久に出、わが千曲川に沿って走り、長野附近から富山県にぬけ、金沢福井、湖西を経て京都、大阪に至る新幹線の構想である。東京〜大阪間の距離は、通過コースによって違ってくるが、大体五六〇粁程度ともいわれており、現在の東海道新幹線の五二五粁に比べ、五〇粁程長くなるだけである。この程度の距離差であるなら、現在開発中の山陽新幹線の技術をもってすれば、いまの東海道新幹線とそう違わない時間で、東京、大阪を結べることになろう。

この北回り新幹線は、今のところまだ単なる構想の域を出ていない。然し、現在の東海道新幹線が過密ダイヤで行詰るのはそれ程遠い時期ではないという見方がありそうなると、この北回り新幹線に汽車の旅の想い出に結びついている。蓼野のあたりから眼にみえて速度をおとしながら、あえぎあえぎ登っていった汽車のなかでの何ともいえないわびしさ、一つ一つ駅をとまっていく関東平野の列車の退くつさ、或いはまた雑水を登り切って、追分の辺から汽笛をならし、急に速度を増して下り始めた蒸気機関車のにぎやかな、軽快な音等々、昔の信越線の想い出はなつかしい。

昨今の電車化で、こうした信越線のイメージもずい分変ってきた。「帰省」とか、「上京」とかいう言葉よりは、「レジャー」とか、「仕事」とかいう言葉の方が何かピッタリするものになったような気もする。若し新幹線が出来て東京と上田を一時間ちょっとで往き来できるようになったときには我が信越線に対するイメージは、どんなものになるであろうか。

（国税庁総務課長）

信越線の今昔

(36)　丸山英人

まずは写真を御覧いただきたい時、十月五日（日）、ところは、都立王子工業高校グランド、中央正面、荒木豊治先生（国際審判部長？）、背面、中沢重夫（現芝浦工大ハンドボール部監督、四十九期）、左右、言わずと知れる元精鋭の勇姿。試合開始の緊張である。私にとって、実に二十年ぶりの楽しい緊張であった。我々四十八期を祖となして誕生した部であったが、連々として今日まで発展しながら存続し、OBその数百数十名をこえ、且つ、東京の青空の下でボールを握り往時をしのぶ親睦試合まで出来ようとは……。頭のうすいのもいる。腹の出すぎのもおる。又溌剌とした学生OBあり。一つのボールを絆として、この楽しさ、この団結、断絶の時代とかはどこの世のことであろう。恩師荒木先生（現長野県立中野高校教頭）に特別の出場を乞いその名シュートに感嘆しながら十分ともしないうちにハアハアとする我が身に、先輩と呼ばれる年令を感じもした。快よい疲労のうちにくみかわすビールに托し、OB会の在り方について大いに談じた。往時もなつかしもう、互に親睦も深めよう、現役の後援も大いにやろう、がしかし、難しいかもしれないが、会員の進学、就職その他諸々事に関して、OB会に相談したら何とかなるやもしれん……。そんな会に皆でしよう！　誓いをこめたうまいビールでした。大先輩皆様より御指導を仰ぎ、後輩諸君　激励もいただき、うんと頑張って立派なOB会にしてゆきたい。ハンドボール部のみならず種々の部の皆さん方、志同じゅうした者こそ集い寄り、若き日を想い、又未来にむけて大いに談じようではありませんか！

楽しかった一日をここに記す。

（菊川工業常務取締役）

株式会社　高見沢電機製作所

本社　東京都品川区小山1—4—35　(492)—2131

工場　長野県佐久市瀬戸　佐久(2)—0088

池田周次(59回)　飯塚博一(59回)　竹内博人(60回)　中沢十千夫(60回)　上原雄二(63回)

荻原愈(40回)　小池坦(49回)　甲田正明(52回)　竹内弘(56回)　藤井国久(57回)　山崎徹(57回)

ケンブリッジ・リサーチ研究所

所長　今井正明(48回)

港区赤坂1—11—45　興和第3ビル　電話 532—8931代

熊川法律事務所

弁護士　熊川次男(48回)

前橋市大手町2—2—2　電話0272—21—4914

精密トルク計・バランシングマシン
ほか各種回転機器用精密測定器

共栄電子測器K・K

社長　半田幸一(48回)

本社　文京区湯島二—二〇—八　電話八二三—七四七九代

菅平高原カントリー倶楽部

国際菅平観光KK

取締役総務部長　赤羽忠雄(48回)

新宿区角筈二—八三　電話　三四三—六八七二

会と幹事

（31）

東京駅長　小宮山庄三

上田高等学校同窓会関東支部の会報「うえだ」の創刊号を頂いてこんな嬉しいことはない。先輩、友人各位の感慨を持続して、懐かしさと同時に、長村から上田まで片道三里の道を自転車通学した頃が、目の前に浮んで昨日のように一木一草まで見えてくる。こうした会報を頂いておくと、何時でも、折にふれて、懐かしい古里の在り日をしのぶ喜びを持つことができる。しかし、ここまでやって頂いた支部長始め幹事諸君のお骨折を考えると並大低のことではない。誠に申し訳のない程感謝をしている。

会報には、夫々各期毎に、俺達の期のまとまりを論っておられるようであるが、吾々三十二回生の在京三二会も他期に劣らない成績をあげていると思っている。

さて、それではお前はどんなことをしたと言われると、お恥かしい次第で、終戦間もない頃の会場難時代に、同僚であった赤沼直人君や柳沢次郎君なぞと、国鉄の集会所利用の便を使って、二、三回当番幹事をつとめた位、何時も幹事まかせで、会の通知を頂く度に、矢島五郎君や、柳達雄君、宮坂三吉君なその顔を思い出して誠に相済まぬことだと感謝をしている。まあ、私は努めて会合に出席して常連の端につながることを心掛けている位が関の山である。三一会がうまくいっていると言うのも、上記三君の三一会への献身的な友情によるものである。氏等がいなかったら、多分こんなに永続きや成果はあげられなかったであろう。

私も二、三会の万年幹事をやっているが、仕事に追われてだんだん延ばしになりがちで、仲間に会うと、おい、あの会やれや、とは言うが、今度は俺が呼びかけようとは言わないものだ。こうした会は一度腰を折ると再開はむつかしいものである。なにしろ同窓会同級会、同郷の集いと言うようなものは、その中から直接に利益を生んだり、商売上の恩恵ものぞめないし、またのぞむものでもない。世話をする人に、人を得ないと存続し、まして発展と言うことは困難である。関東支部が年を追って盛会となり、会報まで発行される程に発展した陰に、会の運営に当っている役員の皆さんのお骨折をあらためて感謝申し上げる次第である。

会誌「うえだ」を祝福する

松本深志高校東京同窓会長　小池　済

上田高校同窓会関東支部発刊の会誌「うえだ」創刊第一号は実に花々しいスタートをして私共を感嘆させました。上質もある大型紙面であり　而もその内容が豊富活気に溢れて居り誠に有益なる雑道紙であると感じました。稲垣支部長・島田副支部長・矢島幹事長・坂井編集長を始め小山上田市長・小林上田高校長諸賢の真実の御つた言葉には勿論感銘しましたが、それよりも一層私の注意を引いたのは先輩後輩一丸となって紙面を賑やしたことで　第三期卒業の今年八十五才の伊沢幹先生から五十五期の成沢祐介後輩迄（後輩といっても成沢氏は日成社社長ということですが）各期全般に亘って記事を載せて居ることであり、これは幹部の同窓会を引張る熱意にも因ることと思いますが、一に同窓会全員に一貫して漲る郷心・愛校心・同胞一如の精神の発露と誠に羨しい限りです。さて今回第二号御発刊に当り矢島五郎さんから私に何か書けとのことでありまして・創刊号読了の感想を述べたわけですが、このほかなにからなにまで驚いたことばかりで、殊に上田高校関東支部の同窓会に出席させていただいたとき太鼓の鳴の中の総会・満堂に溢れる熱気・最後に六文銭の手拭で全員鉢巻をして、二百数十名の手に手を繋ぎ肩と肩とを触れ合って大会場一杯に輪になって踊る大団円は、誠に感動そのものでした。関東支部諸兄の御健勝と会報「うえだ」の益々御発展とを御祈りして終りとします。

校友会雑誌

（22）

横田栄一郎

偶然の機会から、大正十二年七月十日、長野県上田中学校友会発行と、その奥附にある校友会雑誌第二三号を手にすることが出来た。已に五十年にも及ぶ年月が流れている。思わず胸に抱きしめて頬ずりでもしたい衝動にかられるのだった。そして懐しさと嬉しさとで震える手をおさえ、おさえページをくる。見出しに目を通じて最初に気付いたことは、校長、教頭はおろか先生一人だに顔を出していないことだ。ゲバ棒とで交う現今でさえ、送り届けられる高校新聞の類を見ると、校長が最上のスペースに顔を覗かせ、愚にもつかない紋切型の默文を堂々と掲げているというのに、この清々しさだ。改めて当時の先生方の驚然たる潔癖さに敬意を捧げたい。本文が一〇八頁、卒業者名簿に三九頁最後に二三頁をさいて学友会名簿これが大半である。本文の内容は文苑欄、寄書、学校日誌、修学旅行記、県下中等学校校連合競技会記、陸上大運動会記、創作、展覧会記、野外演習記、そして蕉翠欄と九項に設けられ、そのレアウトの見事さは利目に価する。少し内容に触れて見よう。枚数に限りがあるので概ね私達の年度にとどめる。文苑欄の筆頭は流沢信明君の運動に対する希望、続いて、守保宏君の、遅れて来たる友へ、そして、横田の、五ケ年の思い出だ肩に刀が入り過ぎているが天々に面白い。断片、と題して、三年の尾崎義一君が書いているが、流石である。知る人ぞ知る。君は後年秋田雨雀の女婿上田進、その人だ。惜しみても余りある偉人を若くして亡くしていたものだ。長文に亘る修学旅行記は私達が、詩人と憂

ああ堂々の陣を張る

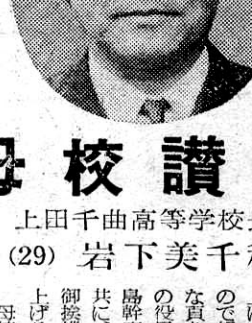
信濃の勇者　我が松尾
打てよ　走れよ　虹を呼べ
真田の血潮　伝統に燃ゆ
松尾松尾松尾松尾　勝利の松

尾、町田太郎先生の作詩作曲になるこの応援歌は野球部と共に信越を席巻し、遂に開校以来の壮挙となって甲子園原頭に進出しました。平安高に破れた地元大阪の人々は「再び真田勢が乗り込んで来てくれたぞ」と大歓迎応援をしてくれたものです。

母校讃歌

上田千曲高等学校長

（29）岩下美千穂



剛って昭和二十一年英国風の紳士といわれた校長上田義雄先生の時代は、赴任して、数度の火災に見舞われ上田先生の悲劇的終焉に逢いました。後任に北島三、高柳厚清水次郎の三先生も、この歌を作られた町田太郎先生も北島人事でした。上田松尾の格調は極めて高く、県内では深志高以外はほとんど問題にせず深志と雖も我に優ることはあまりないと自負しにもので。運動の面でも大いに振修一郎先生がおいでになり、有名な北島人事が行われたのでした。「ティーチャーズティーチャー」を招聘するといわれ、漢和大辞典編集の飯島忠夫博士を始めとして大先生方が陸続として着任されました。同窓の三羽烏と謳われた久保田正三、高柳厚清水次郎の三先生方、秀れた生徒諸君力強い同窓の皆様に恵まれた上田の十四年は実にすばらしいものでした。いつかお礼を申し上げたいと思っていた所でしたので想い出の一端を述べ、貴重な頁をさいて千さつた関東支部の役員の皆様、熱意に燃える矢島幹事長さんに深く感謝すると共に、支部の皆様に心からなる御挨拶と御発展の御祈りを申し上げる次第です。

母校を讃えるいくつもの歌に思い出はつきません。最後にもう一つ、依田先生の愛弟子俊秀小池益夫先輩作詩上中柔道部歌の一節をあげて筆を擱きます。

穹隆高く雲晴れて蒼鷹一羽
空に舞う
二十五年の霸途
一すじ青く輝き
のあと
て身に負うつとめ思うとき
夕日の色はゆるかな

上田高校同窓会に想うこと

小諸高校同窓会東京支部長　荻原富久子

古い歴史と伝統を誇る上田高校特に同窓会関東支部の御活躍は、年毎に充実され盛大な総会の模様など、名物男でいらっしゃる矢島幹事長さんからお聞き致しております。嫁いだ弟が当時上田中学に入学致しまして、剣道の実稽古も欠席した事もなく上田精神のもとによく勉学にも励み、卒業後すぐ土浦の海軍予科練に入隊、はげしい訓練ののち南方に出撃しました。当時の新聞紙上にY機の手柄と（偵察機にて戦闘）と報道されました。ラバウルから一度は帰還しましたが再び出かけ帰らぬ人となりました。当時の青年の考えておりました事は、今の世代の方々には想像もつかない事かもしれません。最近思想問題学生運動暴力と各所で問題になっております、

かりと、自分の考えを持って責任のある行動をしてもらいたいものです。幸い上田高校を卒業後立派な大学に入った甥は「誰も一時は熱病みたいになるが、自分の将来を考えたら馬鹿らしいよ短期間にはやり風は直さなければ」と、たしかにその通り立派な肉体と若さを無駄にしては勿体ない事です。六年前諸先輩のお骨折りにて県同窓連が誕生致しました。限りない空想や希望を抱いて過した学生時代ふるさとを同じにした方々の親睦団体で御座います。先頃の中秋の名月（月面に人類が立つと世界中の話題となりました）に子供の頃お月様は神秘な存在と考えておりましたし又花嫁修行の頃、上田のお茶の先生のお宅でお月見のお点前などなかなか風流な事も思い出しました。

エレクトロニクス産業革命と目まぐるしく移り変るこの時代根本の人間の生活、感情は変るものでは御座いませんお互の親親豊かな心の通い合いこそ大切と思います。立派な故郷を同じにして長野県同窓連の方々卒業されて新しく東京同窓会に入会される後輩のためにもお仕事結婚等お力になって上げられる様仲良く手を取り合いましょう。

日頃尊敬しておりますデラックスな上田高校同窓会の益々の御発展お祈り致します。

たのしきかな幹事会

（36）

副幹事長　神野勝男

「たいへん、おそくなりまして申しわけこわせんが、ただいまより幹事会を開催いたします。はじめに稲垣支部長さんのご挨拶をお願い申しやす」

―支部長、はれた左の頬をおさえながら、やおら立ちあがり、いつもと違う低い声で――

「えー、今晩はお忙しいところお集り下さいまして、ありがとうございます。実は、この間……」

「声が小さい!!」―場内よりヤジ。「うるせえ!!」―支部長の一喝。じろり場内を見回わす。口では怒っているが目には茶目気がいっぱい。矢島幹事長を指差して―

「こういう矢島だの、となりの坊主だの、頭の悪い野郎どもが、よってたかって、この俺に三時間もだら だら審議させるもんだから、この間から歯が痛くてたまらない。たまんないから歯医者に診てもらった。そうしたら、これは過労によるものだ、と、いわれたんだぞわかったか!……」

場内から声あり。

「碁、将棋のやりすぎだ!!」。

「大体、支部長などにたてまつられると、次はどうなるかぐらい俺はちゃあんと、わかっているんだ。そこでだ……」

場内から声あり。

「ご親戚の方から、ご香典を」

「うるせえ!!だいたい神野なんて野郎は、この間勝俣顧問のお葬式のとき、お前は専門家だから弔辞を書け、と、いったら、勝俣先輩の弔辞は稲垣先輩あなたが書いてくれ、そのかわり稲垣先輩のときは、わしが書きやす。と、ぬかしやがった……。

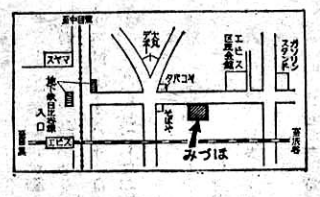
だいたい、幹事長が起案したものを読み、要領よく相談して、この俺が過労に陥らないように、今晩はお願いいたします。」

拍手と爆笑が、しばらく止まない。

食事が出る。協議事項に入る。甲論乙駁。先輩諸氏は勿論のこと若い諸君も、のびのびと意見をのべてくれる。

終われば二次会が待っている。

クラス会・ご商談・ご会合に
ご利用のほどお待ち申し上げます
割烹　みづほ
東京都渋谷区恵比寿西2の2
電話461―8663・433―4537



布施歯科医院
歯科医師　布施信夫（19回）
歯科医師　布施淳子
東京都豊島区西巣鴨3―360　電話（910）3237

堀内税務会計事務所
税理士　堀内茂雄（44回）
堀内良幸（55回）
半田嘉道（55回）
東京都墨田区業平4―9―3
TEL（625）2291代
（出身地　小県郡真田町）

真空技術の日南
食品機械・真空化学装置については試験設備あり、御利用下さい。
社長　宮坂三吉（31回）
日南機械株式会社
東京都千代田区内幸町1―3―1（幸ビル）TEL 502―6201

明光通商株式会社
（MEIKO COMMERCE CO. LTD.）
代表取締役　堀内惇（48回）
千代田区九段北4―1―33　アイボリハウス401号・TEL234―2869代

特許・実用新案・商標及び意匠に関する鑑定・出願・審判・登録申請
工業所有権に関する事項の代理
篠原特許事務所
所長　篠原泰司（48回）
練馬区豊玉中4―11　電話992―7737

同窓大会に出席して

(26)　酒井諭一

創刊号の「うえだ」を読んで実に楽しくなつかしさが胸にこみあげてきました。

たまたま私が東京農林年金会館の世話をしていることから、この会館が上田高校同窓会関東支部の大会、幹事会、その他にご利用していただき、同窓会の皆様のご友情ご厚意に対して心から感激し、深く感謝しております。この会館は農林漁業団体職員共済組合（略称農林年金）が組合員のための福祉施設として建設したものでありますが、広く一般の方にも利用していただいています。

昨年八月八日オープンしましたが、幹事の三十五期の花岡椿さんが仕事や友人の関係で来館され私が上田高校出身であることを知り第八回関東支部大会会場としてご推薦下さいましたのが機縁となりまして、同窓会の皆様の格別のご愛顧を願っており真に有難くお礼申し上げます。

第八回大会の状況はこの会報で詳細に報告されると思いますが、稲垣支部長の熱望されるヤングパワーの出席が多く活気に溢れ、肩を組んで矢島幹事長、神野副幹事長の打鳴らす太鼓に合せて、校歌、応援歌を思い切り高唱した時は年齢を忘れて上田時代を偲びました。美しい自然、よい伝統、尊敬する先生、優れた先輩、親しい同輩、また頼母しい後輩に恵まれた上田高校のよさを今更ながらしみじみ感じました。

私達二十六期生の関東地区の会合は戦前は時折開かれていましたが、戦後は同窓会館建設資金の寄付について村瀬君、西沢君などが幹事となって赤坂の梓というそばやで数回開かれ大いに旧情をあたため愉快に飲みかつ語りました。

その後会合が杜絶えていましたが一昨年同窓会名簿作成のことで幹事の宮入正君が大いに尽力され、関東地区在住の次の二十六名の名簿が出来ました。

石井（一）、石井（公）、岩下上田、大塚、唐沢、倉島、工藤（一）、小泉（寿）、後藤、小林（敏）、小山（正）、酒井、坂口（淳）、坂田（隆）、柴崎、高野（貴）、滝沢（清）、滝沢（傳）田口、制田、西沢、馬場（武）村瀬、宮下、宮入。（あいうえお順）

なおこの名簿に漏れている人は官入君なら私なりにお知らせ下さい。

（東京農林年金会館々長）

三八会同窓会開かる

—物故同窓生の法要も兼ねて—

(38)　穂谷潔

年初から関係者の間で計画されていた旧上中三十八回卒業（昭和十四年卒）同窓会は同窓物故者の慰霊法要を兼ねて八月十五日午後二時から上田市新田晨蓮寺において盛大に開催された。

集まる者は恩師側、高野豊文、柳沢延房（現長野県立短大学長）野明潔、有川広志のかつての学級担任四先生に、物故者遺族側二十九名、同窓生四十五名の約八十名にのぼった。

遠く四国、兵庫、石川、新潟、神奈川、東京と県内外各地から卒業以来始めてという顔振れも数多く集まった。

定刻、導師、大僧正横内浄音師同浄雄師（同窓生）による物故者五十四名の慰霊法要がしめやかに行なわれた。

物故者中には、恩師、福島卓一藤沢延生両先生も含め、戦没者二十七名に及んでいた。

司会—穂谷潔、開式のことば—吉野光明、あいさつ—宮崎盛登卒業三十年記念事業実行委員長、ついで読経、慰霊のことば—中沢慮太、法話—横内浄音師、あいさつ—恩師代表高野豊文、遺族側代表春原五作（故、春原鳳正君父君）

物故者中には、恩師、福島卓一藤沢延生両先生も含め、戦没者二十七名に及んでいた。

司会—穂谷潔、開式のことば—吉野光明、あいさつ—宮崎盛登卒業三十年記念事業実行委員長、ついで読経、慰霊のことば—中沢慮太、法話—横内浄音師、あいさつ—恩師代表高野豊文、遺族側代表春原五作（故、春原鳳正君父君）

各氏などあり、一同焼香、電文披露、閉式のことば—宮下力と無事終了した。

法要中、噛んで含めるような有難い横内浄音師の法話、また、宮崎委員長の（あいさつ）と、中沢

亡父考

(40)　井本公一

私は先般この「うえだ」の創刊号に、「病父考」と題した拙文を載せていただきました。

父も三十余年お世話になった上中を去って拾数年、漸くこの慌しい世間で学窓関係の人々からも忘れかけられているであろうし、一寸でも思い出して戴ければとの気持で投稿した次第です。

そんなこともあってか、その後六月の支部大会では多数の方方から父の現状などお尋ねを受け、また電話で父のニックネームはモコでなくムコですよ、とわざわざ知らせて下さった大先輩もおられました。この方は遂に名前を明かして下さらなかったが、御本人も含むかつての愚童グループが、そもそもの名付親とのことで、拙稿の間違いを気にされての御忠告でした。

その父も先月の八月三日、老衰して亡くなりました。せっかく創刊号で皆さんに想い出して戴いたのに、第二号で訃報とはせわしないことですが、八十四才の天寿で先ずは大往生でした。

父の訃報を知った時、私はその回向文にもなったようです。

墓は故郷の丹波でなく、生涯の大半を過した上田市北房山の金昌寺に納骨しました。

父はその回想の小冊子に、「考え至らなかったため利巧な生活が出来、ただ漫然無働かざるを得なかった」、と述懐して

いにく海外に出張中でしたので八人兄弟中唯一人告別式にも出られず、その私への思い遺りから、義兄が創刊号の「病父考」を法事の席上で列席の皆さんに読んで差し上げたそうです。従ってあの一文は図らずも父への遺言になったようです。

父の訃報を知った時、私はあの回向文にもなったようです。

墓は故郷の丹波でなく、生涯の大半を過した上田市北房山の金昌寺に納骨しました。

父はその回想の小冊子に、「考え至らなかったため利巧な生活が出来、ただ漫然無働かざるを得なかった」、と述懐して

込まれていたわけでしょうが、私には父の性格に暗さは全く感ぜられませんでした。特に戦時中妻と死別したあと二十数年は未婚の子女六人をかかえ、恒財もなく何かとまどう事多かった筈ですが、明治の人らしく困難にひしがれぬ根性は持っていたと思います。その点父の要領のよい人は苦難の精神に乏しいのではないでしょか。漫然無働く事もまた生き甲斐そのものであろうと思います。

そしてその永かった働き場所が上中であった事は、父にとって教育者である事の張合いが持てる幸な環境であったに違いありません。

ともあれ人生の大半を上田で過ごし、多くの方々の温い知遇に接し得た父仁一は、感謝して眼を閉じた事と思います。

幹事長のお計いを戴きましたので、紙上をお借りして一言逝去のこと御報告申上げ、生前の御好誼に厚く御礼申上げます。（四四年九月）（日綿実業技術部）

「写真は故井本仁一先生」

香港雑感

(51)　中島宏

日本はもう秋を迎えているのでしょうが、香港はまだまだ盛夏。連日三十度を越える暑さと七〇％近い湿度で悩まされています。中国人はよくもあこの蒸し暑さに耐えていると思うのですが、とにかく炎天下よく働らき、又あのむずかしい漢字の新聞を読んでいます。人口全体の九八％が中国人でそのうち広東系が九〇％を占めており、彼らは南方民族なので身体の構造も蒸し暑さにたえるようにできているのでしょう。街頭などでハンカチを出して汗をふいているのはたいがい日本人か中国人でも上海人や北方人。広東系人は汗ひとつかいていないようです。

彼らはまことに勤勉そのもの。日本人からみるとまだキメのこまかさが足りないような気がしますが私が最近訪れたファリピンやその他東南アジア諸国の住民たちと比べてみるとまるで雲泥の差。中国人が東南アジアのどこへ行っても経済の実権を握っていることや香港が現在空前の好景気を楽しんでいるのもすべてこの勤勉さからくるのだとしみじみ感じ入りますの。又文明の上からみても古くからの中国文明の伝統を受け継いでおり東南アジアでは日本を除けば他の諸国とは比較にならないということがよくわかります。香港では言葉は北方人、上海人の北京語とビジネス界の英語のほかは広東語しか通じない場合が多くとにかくタクシーに乗って困るケースによくぶつかります。しかしそんな時でも漢字を書けばすぐわかるので この点文盲率の高い他の東南アジア諸国とは大違いです。

このように香港は純然たる中国それも広東人の町ですが 目抜き通りを歩くと中国人のほか、英米人や欧州各国人 アジア人、日本人とまるで人種の見本市のような感じ。英国の植民地なので英国人の多いのは当然ですが、最近は米国系企業の進出が著しいのと、観光客数が激増しているためこうした現象が出ているのでしょう。日本人は在住民二千人以上のほか、観光客が一ケ月平均一万三千人いるので、普段は（一人平均一泊三日として）計三千人以上いるということになります。ショッピングセンターとして有名な九竜半島側のネーザン通りなどは毎日日本人の旅行者団体がゾロゾロ歩いているのが見られます。

又ついでに日本人の活動についてふれますと、香港への日本の進出は国内にいて想像していた以上で驚かされました。例えばカメラではとつくにドイツ製を圧倒してまし、電気製品、薬品などは、日本製がよく出ています。

エレベーターは最新のビルのものは、ほとんど日本製ですし、クーラーも日本品ブーム。又同じ製品でもちょっとしたキメのこまかい品物はほとんどが日本製です。香港の住民の日本への関心は強く、日本語学校も盛んです。日本商品展覧会、日本音楽鑑賞会、日本映画祭なども大盛況。

こんなわけで私の取材するニュースも、先輩の特派員たちの時代に比べて日本関係のものがぐんとふえていますが、なんといいましても香港は中国が外部に向けて開けているほとんど唯一の窓口であるため、中国関係の報道がいぜんとして最優先されます。香港にはいってくる情報にはそれぞれのソースによっていろいろな色がついており、これを見分けて、真実をさがし出すというきわめて至難の任務が香港特派員の肩にかけられています。従って毎日の仕事は数多くの新聞、雑誌、資料に目を通すことと、外交官、学者、研究者、商社関係者などを訪ねて情報交換、ディスカッションをすることが多くなります。又当地に長く住んでいる中国人や、最近中国から出てきた人々の話も聞く必要があります。こうした材料の積み重ねの上で、いわゆる、ホンコン情報を見分け、中国に関するゆがんだ情報や、デマを排除して、中国の本当の姿を正しく知るようにつとめるのが香港特派員の最大の仕事でしょう。とにかくホンコン情報には実にできばえの見事なのがあり、ついうっかり信用させられるようなものもあるので注意が肝心です。又明らかに、ゆがめられたと思われる情報のなかにも一分の真実がひそんでおり、しばらくたつときわめて重大な意味をもってくることもあるので油断はできません。又このほか、交通の便が非常によいことから東南アジア各支局へのリリーフ役という任務もあります。七月末にはニクソン米大統領のアジア旅行にあたりマニラへ飛びましたが、ベトナム情勢急変、その他各国での緊急事態の発生にも備えている必要があり、なかなか神経が安まるひまのない毎日です。しかしそれでもなお体重もふえ、病気ひとつしないでいられるのは、中国料理はもちろん西洋料理、日本食となんでも自由に食べられる、香港の環境のせいだろうと思います。

（共同通信香港支局）

獅子の会

(44)　堀内茂雄

幹事の星野（旧高橋）君から恩師を囲んでの在京の獅子の会を開催すべく、会報ノ切を伝えられたのは秋分の日の前日であった。

獅子の会については創刊号、星野君が古き時代と新しい時代のパイプ役になろうと書いている。

私が、東支部大会に始めて出席しこのような強大な団結と友情にあふれた会合をもつ同窓生であったことの喜びを感じました。

大会運営にあたった諸先輩に深く感謝します。我々の上中に学んだのは戦争に明け暮れした時代であった。入学の年の昭和十六年十二月に大東亜戦争が起り卒業の昭和二十年八月が終戦である。

その間十八年末より二十年にかけて数多くの学友が予科練等軍隊にはせ参じ入隊していった。

中学入学の口頭試問が満洲を知っているかを調べたい為か今朝は何を食べて来たか、大豆はどこでとれるか等であった。女学校の試験では将来良妻賢母になると答えて良妻賢母とは何かに困ってしまった。

あるとき、五十に亜んとする今日、母校上中の校門を辞して三十年、今更昔に思いを及ぼし交歓できることも、これ青春多感な時代の教育の然らしむるところと深く思った次第であった。そして今は住む所は遠く離れていても、心の絆は固く強く、結びついていたと痛感した。寒終了直前、校歌、凱歌を拍手のうちに一同斉唱し、他日の再会を約して山門を辞し散会した。

今回の法要は第三回目であった。なお今回の法要について次のような遺族からのお礼状を頂いたので一部分だが掲載する。

「あの大本堂に於て壮厳且つ静かに流れる読経に暫し冥目、心なしか二十余年間一刻も忘れることのできなかった我が愛児に突然対面でき、譬えそれが幻であっても現実の姿に接した気持ちに浸ることができ本当に嬉しい限りでした—以下略—」　坂口司氏（故坂口毅君父君）より—

今回の三十年記念事業の一端として同窓生名簿（含む物故者）が完成しました。若干余部もあるので希望の向は申し出てください。

（上田市役所勤務）

恵太君の（慰霊のことば）は切々として参会人の胸を打ち、涙を誘った。

境内で一同記念撮影後、直ちに（おとき）を兼ねて同窓会に入った。

坂下要助—あいさつ、穂谷潔—経過報告、と参列者遺族と一人一人紹介し、遺族代表—藤沢紫朗（故藤沢延生先生実兄）氏のあいさつがあり宴に移った。

折柄、盛夏庭前の蝉しぐれの中同窓生間では三十年振りの久闊を交わすと共に、一方遺族間とは故人との思い出話などに花を咲かせた。

学生服を着たのも僅かな期間で戦闘帽に脚半の時代である。通学時も絶えず緊張して歩調をとっていた。戦争は漸次苦戦をきわめ我我若者を戦場へかりたてる時代となった。学業半ばで予科練に入った我々は日夜きびしい訓練に自己をみつけ出す暇はなかった。やがて敗戦。復員後は国敗れて山河ありをつくづく味わった。勉学に励げもうにも目標を失い廃人状態がしばらく続いた。でも有難いことに予科練帰りの我々に学校当局は卒業免状をさかのぼってくれたのでどうにか世に出られるようになった。

大会会場で竹内敬太郎先生にお会しました。先生は二十五年振りでも私達の名前を覚えておられたのには驚きました。同期会には是非出席を願ったのだがついのびのびになっている。四十五年正月は恩師を囲んで盛大に一席をもうと、当日出席の星野、市川、宮入君等で相談しました。この会報をかりて同期生に呼びかけます。いづれ通知も出しますが今から待機して下さい。　傍陽出身の「山さる会」の語兄会報が手許につく頃再会しましょう。

関歯科医院
歯科医師　関勇悟（48回）
上田市上田原
電話　〇二六八二二六八三

電子卓上計算機・電動加算機
ユニトレックスセールス　株式会社
取締役営業部長　山崎延秋（48回）
東京都港区北青山2丁目3番7号　TEL（404）—5611代

食料品卸
富士和
代表者　黒坂盛三（48回）
〒宿区築土八幡三一一二
電話　二六〇—四五八四

会社・工場給食
入山食品株式会社
代表者　入山一徳（48回）
三鷹市下連雀197　電話　0422—43—4783

反省そして更新

（母校元教諭）　松岡重三郎

私が旧制上田中学に勤務したのが昭和四年秋十月であるから、すでに四十年の昔であります。あの古色蒼然たる校門、そして学校を取りまく土塀には、ほり残した蓮のわくら葉が秋風にゆれていたことを忘れません。真田氏、松平氏にゆかり深い土塀、思えば限り無く心ひかれる気持で一杯です。今では学校も中学より高等学校へと発展し、量的にも質的にも、その規模は戦前から見ると、ぐっと大くなりました。長野県の名門校として、本県、群馬にも伝っています。其処で旧職員として、是非此の名門の名を、長々確保して貰うよう熱望してやみません。その意味で今私は国際ロータリー会長コンウェイ氏の言葉を上田高等学校に呈上したいと思います。それは「レヴューインドレニュー」日本語に訳して「検討し、更新せよ」という言葉です。私はこの言葉を噛みしめて、同時に中国の有名な句を想い起しました。殷の湯王の洗盤に刻まれた「苟には日に新なれば、日々に新にして、又日に新なり」の一句です。これは儒教の原理を説いた基本の書、大学に載っており、常に厳しく自己反省し自己検討し、自己批判をしなさいそうすれば、惰性に流れることもなく、マンネリズムに陥ることもなく、時々刻々自己を脱皮し、更新することができるという意味にとれます。之は、コンウェイ氏の言葉とそっくりです。私にとってこの三千年前の湯の洗盤の銘は、座右の金言であり、自戒の厳言であります。私は上田高等学校の校風が、常にフレッシュで、新進の気に燃えていることを望んでやみません。その為には、上田高等学校の皆さん、このコンウェイ氏の「レヴューアンドレニュー」の一句を深く味い、実践して下さい。

尚又私にとって中国の言葉で好きな句は「十三日書を読まざれば、其の言卑しく、其の面緋卑し」の一句です。少くとも自己完成を念がけるもので、三日も書を読まず従って、冷厳な自己反省も、自己検討もしないで、漫然と好い気になって惰性に流され、マンネリに陥った生活をしておれば、その面構えも卑くなり、その言葉も新鮮味を失った魅力のない卑しい言葉になってしまうという意味で裏がえせば、常に勉強し、自己への省察、検討を怠らない者は、常に自己を脱皮し、自己を一新してゆく者で、其の顔も生き生きとして清新溌剌な魅力をもっており、其の言葉にも張りがあり、フレッシュな魅力をもって人を感動させるものであります。正に「検討し更新せよ」の言葉と待節を含わすものがあります。最後に、古き歴史と伝統を誇る上田高等学校の面目の、又常に清新溌剌、新進気鋭の雰囲気に燃えていることを通に祈って筆を擱きます。

（群馬県利根商高校長）

プロ野球と私生活

（58）倉島今朝徳

私の職業はプロ野球選手である。世間に、父親の職業柄、その家庭が普通の規則正しい生活を送れないという様な事は、沢山あると思う。月に平分位しか遠征の為家庭生活を送る事が出来ないが、私の家庭も例にもれず、その一つである。私の家族は29歳の自分を頭に妻と長男（三歳）それに生れたばかりの長女（一ヵ月）の四人住であるが、十一時にやっと起床し、車で球場に出掛けるのは午後二時頃、ナイターが終って帰宅するのが十一時頃になり、それから家族そろっての夕食である。昼寝を毎日二時間程しているとはいえ比頃では三歳になった長男が、下に長女が生れたばかりで妻が忙しいものだから充分に相手にしてもらえないとみえ、私の帰りを待ちかまえていたとばかりに大声で「お帰りなさい」と迎えてくれる。そんな長男を見るにつけても私がプロ野球選手で休日が無いから仕方のない事かも知れないが、父親として本当に可哀そうだと思う。妻に近所の人とか知人がお宅は朝ゆっくりで良いとか、……。いわれる様だが、何の不安もなく、子供達の面倒を見てくれ家事いっさいをまかせられ又、家庭をしっかり守ってくれる妻や子供達に、太陽の高くのぼり切った頃雨戸を開け、ギラギラした陽が目にしみる頃起き、そして、皆寝静まった頃の夕食、床に入るのは午前一時過ぎという様な生活は普通の家庭であったら、ぐっすり寝ていて事でも見ている頃ではないだろうか。職業柄とはいえ、妻や子供達に少なからず不満があると思う。「プロ野球選手は一年中がトレーニングではなくてはならない」といわれるが、今シーズンも残り少なくなった現在、長男と約束してある、遊園地と動物園、飛行場、それに家族そろっての食事に出掛けたり、田舎の温泉場でも廻ってつみほろぼしとでもいうか全員で骨休めをしたいと思っている。

しかし、何んと申しましても野球のお陰で何んとか生活出来るのであって、不満はあっても、家庭内は明るいし、こうして人並の生活が出来るのは、矢張り野球をやったお陰である。今日どうして曲りなりにも生活出来るのは、上田高校在学中での野球部があったればこそ、それが今日自分の羅針盤になったと感謝すると同時に、私の為、沢山声援してくれ、又、しんみになって指導して下さった皆様方にこの紙面をお借りし、御礼の言葉を申し上げます。（サンケイアトムズ選手）

旧友遠方より来る

（20）峯村英薫

九月二十一日　日曜日

早朝六時四十三分、大阪駅着の第三ちくまで春からの約束通り上中廿会の遠藤恭介君がやって来た。昔なじみなので家妻も一緒に出迎える。駅食堂の腰掛でみそ汁と茶づけ。市内は高速道路で飛ばし奈良へ向かう。車中、先輩兎束武夫の逝去を知らされた。遠藤君にとっては、からたちコーラス団を共に続けてきた同志なので、きのうのお悔いをつめた上、やっと出て来たという。折から彼岸第二日、その心がちのせいか全く秋晴れの好ドライブになった。万葉研究家でもある友のために選んだコースは、先ず秋篠寺。本堂修理中で、家妻と二人の交渉で開扉を早めてもらった仮堂の技巧天女はいつもの暗がりでなく、姿態色彩共明るいなかでちかぢかと拝めたのも望外。続いて鑑真和上の唐招提寺、白鳳の薬師寺。唐招提では金堂円柱のエンタシスと盧舎那仏や千手観音の圧倒的な美、薬師寺では金銅仏三尊の黒耀、聖観音立姿のきびしさ、そして凍れる音楽の東塔や仏足石のあたり、さすがにドクトル文化人の興は止りがちであった。

平城宮祉から奈良市内に入り、興福寺畔の一亭で昼食のあと、高畑地区、廃朽の築地塀を新薬師寺へ。神将十二体、本尊を囲み十二支全方位を守護する菩薩化身はすべて塑彫、その剥落のひそけさは曾ての極彩色よりも深く心を導くといわれるもの。奥山ドライブウェイに初秋を味い、大和平野を一望にする三笠山頂、鶯塚古墳を八ミリにおさめる遠藤君のポーズは私のカメラに失敬しておく。

山を下ってあらためての春日大社詣では、丹朱の社殿に式直後の新婚一組の点景が清らかで、三月堂の不空羅索観音と日光、月光は天平を語るために特に拝んでもらう。大仏殿では秋雨の日の五十余年前の中学旅行を偲び、正倉院周辺の秋、すすきのそよぎには、少年期に帰ってひとしおの心を寄せあった。全コース終了が三時。名神ハイウェイルートで万国博現場を車窓に見ながら西宮の小宅へ。

さて、この夜の集いも、遠藤兄弟親友の中村祐吉氏、上中後輩す田中治太郎君。家妻の同窓平井さんとその夫君。これが終始上田を語るひとときで、それにしても、この春以来、東京、別所と度々の廿会の世話に当ってくれた石井保君や水沢道男君には特に感謝せねばならないが、そうした間に生れた遠藤君との約束が今日の一日になったのは嬉しいことであった。

なお、遠藤君は翌朝福山のお嬢さんを訪問の旅に立って行った。

（大和銀行顧問）

松尾球友会発足の辞

会長（16）片岡武雄

六月の下旬だったか、上田高校野球部のOBの会があるから出席しろとの連絡を受け、何十年振りに球友諸君の顔でも見られるかと気亜るに出かけた。先輩の太田八郎（12）はじめ井出俊一（18）後藤文夫（20）の諸氏、若い方では甲子園出場組の神津進（56）君達の若さに溢れた顔も見え、又郷里上田より沓掛後援会長、母校より上野野球部長の出席もあり、仲々の盛会で十二回より五十八回の各時代の野球談義に花が咲き、時の経つのも忘れまことに懐古の情に満ち溢れ、しばし青春の血をわきたたせるものがありました。この席上、満場一致で松尾球友会の設立を決定し、不図も初代会長に推され老骨に鞭を打つことになってしまいました。私が上田中学時代ボールを握ったのは半世紀も前になりましょうか若い諸君には当時の野球は想像できぬと思いますがボールの感触は今でもはっきりと思いだされ、野球放送のあるときなどは思わずテレビのチャンネルに手が伸びるから全く不思議なものです。

雀百までおどり忘れずとはこの事でしょうか。幸い現在は健康に恵まれているので、伝統ある野球部の発展と本会の充実に微力を尽すことに決心いたしました。

第一に現在は在京のOB諸氏だけですが郷里を含めた全OBを速かに結集拡大すること。

第二に母校野球部に対する物心両面の援助の体制を確立すること

第三に会員にはOBに限らず広く同好の士のご加入を勧奨すること。

以上のことは球友会発足の理想でもあり一朝一夕には目的を達成することは容易ではありません。いうに易く行うに難きことと存じますので関係諸賢の一層のお骨折をお願いするとともに、同窓生各位の絶大なるご支援のほどを切に期待するものです。

会長就任にあたり実情の一端を述べて挨拶といたします。

野球の思い出

（18）井出俊一

信州に野球がやって来たのは明治二十年頃で、まず松本中学にチームが出来て当時松本中学の支校だった長野、上田中学へ普及されて来たのである。母校を明治三十四年（支校時代）卒業の故宮原清明治三十五年第一回卒業の故桜井弥一郎さんは緒に慶大で明治三十六年秋よりスタートした早慶戦に出場され当時の新聞欄に桜井投手（上田中学出身）と記され、その活躍ぶりは全国津々浦々の人口に膾炙されたものである。宮原さんは日本社会人野球協会の会長を務められ、お二人共野球博物館へ掲額される名声を得、母校の輝かしき野球部の歴史の第一頁を飾られたものである。私は大正四年より七年迄野球部に在籍したので当時の野球界の一端を述べたいと思います。明治時代の強豪松本中学に代って長野師範が県下に覇をとなえる時代となっていたが母校野球部は部員も少なく不振であった。大正六年になって運動に熱心な教師が数名就任されてから野球部はじめ陸上競技等も盛んになり、柔道部より遠藤文介、故井上功太郎氏の入部を得、マネジャーに馬場三子男氏が就任し、部の為につくされた。投手で有名だった大井源太夫君も入部しコーチには慶大の森秀雄氏の厳しき指導を受けて大いに志気が上った。当時は県下の対抗試合は少なかったが、長野、飯田、野沢の三中学の挑戦を受けたが何れも鎧触一蹴勝利を得た。

大正七年初めて第四回朝日新聞主催の中等学校野球大会甲信予選の出場が決り、マネジャーの小川栄一氏、故安原新次氏、故勝俣稔氏の弟さんが部の為に奔走され、応援歌の「松尾城頭」もこの年に創られたのである。長野師範は全国的な強豪で一高の往年の名投手内村祐之氏のコーチを受けており母校のコーチには太田八郎氏、故懸山憲一氏が当られ、試合の監督には懸山氏が入られたと記憶している。甲信大会は長師のグランドで行なわれ一回戦で長師と対戦し上中の投手は大井君、長師は山崎君共に好投して熱戦を展開したが惜しくも四対一で敗れてしまった。安打では長師をしのぎながら敗れた悲しみは現在でも無念の想いに時を過すことがある。当時の信州に於ける小学校の野球も仲々盛んで稲垣現支部長さんは野球でも非凡な才を有し、柔道に限らず野球でも後世に名を残す名手になった事は想像に難くない。野球部にとって誠に残念なことであった。

（続く）

（株式会社江島屋常務取締役）

松尾球友会結成さる

（32）中村礼三

数年来同窓会幹事会に於てOB有志諸兄と話し合っていた夢が遂に六月二十一日、上田より沓掛後援会長、上野野球部長両氏上京、関東在住のOB二十一名参集して結成されました。

称して松尾球友会と申す。役員には左記の諸氏が決定されました。

会長　（16）片岡武雄
副会長　（25）馬場長市（27）勝俣拡
顧問　（12）太田八郎（18）井出俊一（18）（遠藤文介（20）後藤文夫
幹事　（29）六川善一（32）中村礼三（36）高遠弥六（52竹内盛夫（56）神津進（57）横沢武久

六十年来の空白を一挙にぶっ飛ばし会員一同一致協力し、確固たる基盤を築き所期の目的を達成したく存じています。

OBに限らず同好の士のご参加を大いに歓迎いたします。奮ってご加入下さい。

尚、いまだ多数のOB諸兄の消息も不案内な情況にありますので、同窓、同期の諸兄のご協力を切にお願い申上げる次第です。

今度特に本会の結成に絶大なるご支援を賜った（21）島田次郎先輩及（32）若林正吉氏（上田市役所）に深甚なる謝意を表するものです。

（連絡先）
東京都杉並区西田町二の三三七
松尾球友会　中村礼三　TEL
（三九八）六〇四五（午一六〇）

幹事会有志母校訪問する

春から計画されていました当支部幹事有志の母校訪問の旅行は十一月十六日（日）十七日（月）の二日間にわたって行われる事に決定しました。

当日は稲垣支部長、坂井副支部長、矢島幹事長をはじめ幹事多数の一行が別所温泉一泊後、母校、新築なる上田市役所、上田染谷丘高校等を訪問しそれぞれ観覧する予定です。母校では在校生との懇談も行われることになっています。

祝
松尾球友会の設立
本会の発展を祈る
清水信（32回）

石木税務会計事務所
税理士　石木林
（旧姓上平）（40回）
東京都渋谷区渋谷3丁目18番2—701号カネイチビル
電話（409）0721（代）
（上田市長島出身）

ネオン、プラスチック看板
国際電飾工芸社
代表者　中村礼三（32回）
東京都杉並区西田町2—237〒（136）
TEL（398）6045

第二号によせて

併・私どもの会にお招きして

上田染谷丘高校東京同窓会顧問　芦田愛子

「うえだ」第二号。楽しみにして居ました処、計らずも比の度は私にも一言との事で恐縮致しました。

第一号御発刊直後の六月十三日上田高校同窓会第八回関東支部大会が催され、稲垣支部長様の御厚意で我が染谷丘東京同窓会より三名の御招きを受けました。会長佐藤学、副会長吉田きわ両人と共に私もお仲間入りさせて載きましたのでその時の模様を記して比の責めを果し度く思います。その夕三人は会場大広間へ矢島幹事長様に伴はれ満員の人波を分けて着席。さておもむろに右や左を見廻せはこれはシタリ・各界御招待客のお歴々綺羅星の如く居並ぶばし私はこりゃ大変な処へ迷ひ込んだとギックリ、

処が次々とくだけた御挨拶。御祝辞の後は老も若きも「オマヘ・オレ」と生地丸出しで和やかな時は流れ。私のキラボシへの恐れも暁の明星の如くに消え去りました

第二部に入り校歌、寮歌、凱歌等大太鼓の勇壮な伴奏でスクラム組んで歌ひ連れ、果ては私達までがその輪の中に解け込んで行く。流石は男子校の集ひその豪勢さに圧倒された私達は由緒ある六文銭の手拭で鉢巻され舞台に上って彼の「信濃の国」を歌ったのでした二百余名のオノコの中のたった三人の乙女（しかも老いたる）である事も忘れて。猶私は副会長屋田次郎様が昔私の隣家に居られたシロチャンその人であった事を発見し、固い握手を交して遠い遠い少女時代の思出に感無量。又亡兄の友布施信夫様にもお会ひし「あんたが愛ちゃんかい」なんて驚かれました。最後に十月十二日東条会館に於ける染谷丘同窓会のお話。当日御来賓の稲垣様矢島様牧内様半田様又御遠路はるばるの小山上田市長様に厚く御礼申上げます。矢島様の「無料」の手品は拍手喝采。支部長様の「一分一万円（時計を見）」めて、万円の賃になった御演説には爆笑。我が会計部は頭痛鉢巻の事でせう。免も角これで上田高校さんとのお付合は名実共に確立。今後共御指導御願申上げ併せて本紙の御発展を御祈り申上ます。」

我が青年教師時代

旧師　奈雲行夫

昭和十一年といえば就職難の時代でしたが、当時の上中の土屋弱太郎校長がある日突然私の学校にやってきて、授業の合い間に面接し採用を即決されました。中学の恩師K校長に相談したところ「県立中学だし信州は教育王国といわれる所だから修業の積りで三年行ってこい」と励まされ意を決したわけです。今から考えると当時の校長というものは大したものだったと思います。初対面でわずかな時間に採用を即決するなんて信頼感がなくてはできるものではありません。

四月に新任式がありましたが私が最年少でした。私にはすべてが新鮮でした。猛烈に勉強もしました。うそを教えないことと実力ある教師であることが私の願いでした。授業にも創意と工夫を常に心がけていました。教室は真剣勝負の道場と考えていたので、ととんまで追求解決する態度を教え込みました。生徒にとっては厳しい授業であったと思いますが、当時の生徒は少しもへこたれず、むしろますますエスカレートして教え甲斐がありました。生徒は教師の鏡であるということを今にして考えさせられます。しかし、私は教室外ではよき理解者としつとめました。放課後も六時七時までクラブの指導をしたり自習の面倒をみたりしました。勤務時間や給料のことは考えませんでした。生活のすべてを上中にかけていたものでした。日曜などにはよく生徒が遊びに来ました。

四十期の卒業生の入学した年に私は新任したので、その時の五年生や補習科の生徒の中には私より年上のような感じの生徒もいました。しかし、上田尚志会という校外生徒会があって上下の自治活動と交流があり親睦の機がありました。早速教え唄ができ『七つおしゃれの奈雲さん』なんて合唱され面くらいました。自分で意識していないことを生徒はすかさず率直にずばり表現するものなのです。油断もすきもあったものではありません。自重自戒、襟を正す姿勢がいつの間にか身について、まじめ人間ができ上ったのかも知れません。

昭和十三年八月下旬、勤労奉仕で農家の桑の木堀りを終えて学校に戻った所へ召集令状が来て補充兵として歩兵第三聯隊に応召することになりました。時間的余裕がなかったが、生徒や父母が激励に来てくれました。中でも忘れられないのは、当時五年生のK君がやって来て青ざめた顔をして「先生！これ…」といって小さな包みを差し出したので早速あけて見ると『血染の国旗』でした。彼の左手の小指には包帯が巻いてあるではありませんか。私は非常な感動を覚えました。「ありがとう」と言ったきり声が出ませんでした。

その翌日私は上田駅頭を埋め尽した市民に送られて出征軍人として出発しました。並びきれない生徒は線路に沿って「バンザイ」を叫び続けていました。

次の駅も次の駅も上中の生徒がそしてその父母が送ってくれました。それは軽井沢の駅まで続いていました。

入隊後幹部候補生を受けるよう奨められましたが「私は教員として現職のまま応召したのだから」と言って断り続けました。先生と生徒が慰問に来てくれたこともありました。満州にもやられましたが、二十ヵ月で召集解除になり、再び上中に戻り、十七年四月東京都に出向を命ぜられるまで勤めていたわけです。

私の青年教師としての上田時代の逸話は数限りなくあり書き尽くせませんが、私の教職観、人生観は、この上田時代に確立したように思われます。信州人の気質が身につくほどになったのも、教えつつ学びとったことの一つと思います。上田はほんとによい所でした。

〈都立京橋商業高校定時制主事・歌人〉

上田染谷丘高等学校 東京同窓会に招れて

(47)　牧内操

「われ、明日、予定あるか」

矢島幹事長からの電話である。いつも乍ら、なつかしいやら、おっかないやらの先輩の声。丁度、明日の日曜は帰郷する予定だった。「そんなもの、一日延ばせ、染谷丘東京同窓会へわれも出ろ」これには驚いた。顧みれば上中時代、あれほど憧れたハイヤーの同窓会へ出席するとは――一も二もなく、「あーいいですよ」間違いなく出席します」と言った声が上調子だったのには、われ乍情けなかった。

10月12日、東条会館へ午前11時に来い、と言う事で、当日、期待に胸ふくらむ思いで出席してみた。

稲垣支部長、矢島幹事長、50期の半田収一郎君と私が大きな腕章をつけてもらって、稍々緊張し乍ら一段と冴えた男振りで並んでいた。暫く遅れて、上田から、市長の小山一平先輩が加わった。

男性はわれわれ上田高校の他に、染谷丘高校の教頭先生と長野県高校同窓連の沢村さんで、これ以外はすべて、女、女、女……。

然し、惜しむらくは、私の様な若者には、不向きの女性ばかり――支部長、幹事長には、ピッタリの様子で、いつもの威厳は暫く棚へ上げて、これ以上ない幸福のシンボルの様な顔で、あっちへスイスイ、こっちへスイスイ、殆んど自分の席にはいなかった。

小山市長のはなし

「昔の事を思うと、私が今、こうして女学生の中でしゃべることなど、とんでもない事で、心臓が飛び出しそうな思いがします――」

稲垣支部長「――私は色男でありますので金も力もありませんけれども――――私の演説は自称一分間一万円です。今、九分間しゃべったので九万円寄付した事になりますからよろしく――」とは稲垣先輩ならでは出来ないはなし。

矢島幹事長は「東に浅間の白煙を眺め、南に千曲の清流を闘き――」と例の名調子で長々とぶったあと、種の判りそうで判らない不思議な手品を堂々と熱演、上中健児の面目を遺憾なく発揮した。

半田君は、知る人ぞ知る名カメラマンで、あっちでパチリ、こっちでパチリ。後で問題になりそうな先輩達のスナップや、自分の気に入った女性のうしろ姿などを、真面目そうな顔して撮っていた。私としては先輩達が年甲斐もなく相好崩して大喜びの様子を横目でみていても誠につまらないので、年格好のあいそうな相手を探して会場の中をウロウロしてみたら、4、5人ではあったが丁度、おない年の彼女達がいたのには涙が出そうに嬉しかった。――――ところが彼女達の曰く、「あら、この人私達とおない年、それにしては老けているわね」「そうでもないわよ、ヒゲが生えているから老けてみえるのよ。まだ皮膚がたるんでないわよ」

なに言ってやんでェ、俺の方が、がっかりしたぜ。俺とおない年だと女はこんなになっちゃうのかーでも、往年の美女に囲れて、ビールを飲んで、だんだん私も先輩同様、いつのまにか浮いた気持になっていた。（牧内会計事務所長）

（写真は染谷丘高校東京同窓会にて）

どてがらす訪問記

カメラぶらさげコンニチワ

(50)　土手野・加楽巣　〈1〉

むかし上田の土手に居りやした方ラスでごわす。オッチョコチョイと物見高いのが祟りやして上田を追われ東京え来やしたが悪い癖は直りやせんで性懲りもなくアチラコチラ覗いちゃあマイクロホンの代りをして喜んでるゲーもねえ野郎だが結構皆の衆も楽しんでくれやすので会報にも良からずって思いあたりやしたんで書かせておくんなすって。

本会事務局の札がデンと……

先ず舞いおりましたところは、川口市並木町二の十一の六番地、国電は京浜北東線の西川口駅から三分位で間口数間の上に矢島鋳工株式会社と横書きの大看板、然しだ入口はドマン中の柱に白木の大表札がデンと掲げられ、それに書かれた文字は〝社団法人上田高等学校同窓会関東支部事務局〟だ。感激して思はずカア！

天気も良かったが広い間口は全部開け放されていて実に開放的だ。そして中の壁には上田城の写真や六紋銭のノレンに第八回大会の記念手拭等が張り巡らされている。

一瞬事務局が矢島鋳工に一部を借しているのではなんて考えたりして又もやカア。

然様、上田中学校の第三十一回卒業で本会の今日を築いた一人であり現在も幹事長として同窓会に情熱を傾ける矢島五郎氏の本拠である。幹事諸氏は度々訪れ御存じの通り、だが会計諸氏は種々通信のウラ書きと返信の宛名でしか御存じあるまい、そこに此のカラスが第一番に舞い降りた目的があるのである。カアー。

―縁の下の力持ち―

社長矢島五郎氏と朋に当る林嘉市氏両氏の会えの尽力は衆知のところ、然しお二人とも同窓生であるのでここでは差し控かせていただき同窓ではない社員方の親身の御協力ぶりを御知らせしたい。

お名前は山本秀雄さん、祖父江宏三さん、成瀬博さん、と申される癖もしき美男子三氏に有馬治子さん、手塚秀子さん、有馬晶子さん、と申される麗しく若き乙女の三顕。本会の通知状等は全てこの方々に依って送られる、印刷から封筒の宛名書き迄二千余通と大変なものだ宛名の麗筆も彼女等によるものだからだ、そしてこれらの作業は全く会社の時間外に行なわれるとの事（会社では利益向上に大活躍）普通ならレジャーを楽しむ時間を我等が会に尽くして下さり、その他に訪問カラスにエサの世話など枚挙にいとまない。

正に縁の下の力持ち……いや本会はこの皆さんに依って支えられてると申して過言ではないだろう。我等が親分稲垣カラスはじめこれを知るカラス共は皆感謝感激しいくら賛辞を尽くしても報恩をとハバタキし遅まきながらも感謝状と記念品を贈ることを幹事会全員賛同、いや一羽矢島カラスが反対した、このカラス大分前にこの件が出された時も強引に反対し通したが今度は通らない。感謝をすることはイイことだ、そして一刻も早くすることだ。カアカアこの記を矢島カラスが読めばカア。カアに怒り私は田楽にされるだろう、されれば化けて訪ね多々あることを書きまくる。カアカアカア。

矢島鋳工入口の本会札

菊川工業株式会社
常務取締役　牧内　清（48回）
本社　東京都墨田区菊川2―18―10　TEL 631―3231代

各種プラント並びに諸機械設備、設計監督、据付配線工事
三誠工業株式会社
会長　矢島美貞（24回）　社長小林啓之介（48回）
本社　品川区北品川4―8―15　電話 445―1826代

東京 農林年金会館
憩…宿泊室（和・洋127室）
幸…結婚式場　衣裳室・美容室・理容室・写真室
宴…大ホール（500名収容）
大小宴会場・食堂・グリル
話…大・小会議室
階段研修室等料理教室
東京都港区芝西久保巴町33―1
東京 03（432）7261
（地下鉄・日比谷線・神谷町下車二分）

株式会社 伊藤商会
取締役社長　伊藤傳兵衛（48回）
長野県上田市海野町4813番地
TEL上田②3570（代）

荒井信明会計事務所
税理士　荒井信明（51回）
中央区日本橋通3―4三伸ビル
電話（274）4916代
自宅 杉並区下高井戸4―228
電話（302）0397
（上田市上房山町・出身）

同窓会とは

在校生諸君へ

副支部長（23）大森頼雄

「やあしばらく。ほんとうに何年になるかな。すいぶん白くはなったが元気だね。今何をやっているんだ？」

お互に手をとりあって嬉しそうに大きな声で呼びかけている。

本当に満面微笑の姿ははたのにも羨ましい。

「やあしばらく。君の方の学年はどう？　今日はみんなでやって来たよ」

元気な青年達の挨拶である。いかにも若々しいが言葉はかくしきれない。

「先生しばらくでした…」

皆が代る代る挨拶に近寄っては離れて行く。終始眼を細くして一人一人に挨拶をかえしているのは懐しい先生である。

開会の時間が近づいてくると、入口の行列は長くなり受付は大変である。

同窓会関東支部は毎年一回春のよい日をえらんで大会を開いている。会はいつも盛会で大変な賑かさである。学校も創立七十周年近くにもなると同窓会員も老若といっても、年令差は大きく八十余才の者から十余才の者までほんとうに広い範囲の仲間である。職業は千差万別である。だからこそ難かしい一つの議題をとりあげて論議する場ではない。会員の親睦をはかることが大きな目的の集りである。会員がしばらくぶりに一堂に集り、談じ、笑い、歌いまた踊り、あるいは感きわまって涙ぐむこともでてきようというわけである。それがどんな意味があるのか義務や権利があるのかないのか、幸福なのか、不幸なのか、良い思い出をもつ者、辛いことだけ思いだす者、故郷を懐しむ者、友を呼ぶ者、めいめい自由であり、勝手であり、人さまざまである。このチャンスを生かそうと殺そうと、利用しようと捨て去ろうと自由である。

なお会員や母校の皆様への連絡をさらによくして親睦を増そうと同窓会報「うえだ」を発行している。

現在、一生懸命勉強している在校生諸君、三年間はほんとうに短かいようでも人生にとっては大切な一時期である。学ぶのにも遊ぶのにも、悔いのないような、充実した生活を希望したい。君たちが卒業して上京された時には東京には同窓会が待っている。先輩後輩の自由な親睦の場としての同窓会が！

〈雑感〉

上田高校三年　瀬下幹夫

人間が人間たる事を放棄せざるを得ないよう強要され、しかもしだいにそういった環境に抵抗しようともせずまた疑問を覚える事すらいつのまにか忘れてしまう。

人間の慣性とは哀れな物でこの混迷続けるメカニカル社会の中にあっては「個の自覚」などという物は、いつかはその中に埋没、もしくは埋没を余儀なくされてしまうものらしい。

我々は恍惚と嫌悪の入り混じった日々を送っていて、時としてふと自分が酷く醜悪奇怪な化け物のような容貌をしているのではなかったかと、水面やガラス窓に映る自分の影から思わず眼をそむけ、やがて恐る恐る眼を向けて見たその鏡の中に、いつもの変わらぬその顔を発見し、ほっとするやら悲しいやらで、どうにもいたたまれない気持に襲われる事がしばしばある。

思うに現代社会は人間の精神的飢餓感を助長するだけでなく、その人相までをも変えてしまうようである。

そういった、怯だと焦燥と倦怠と、エゴイスティックな享楽的意志だけが怒涛を巻いて充満している現在の状況の中で、人々は我々青年に、かつて今まで存在し得なかった程の切実さをもって、純粋な、ひたむきな、敬虔かつ主体的な姿勢を切望している。

我々はその要望に応えるべく、この峻烈きわまる過酷な受験戦争の渦中にあってさえ、なおかつ、その真理に対する真摯な自律的態度を養成し、保持せねばならないはずである。そして高校とは、まさにそういった人間的人間、深い知識と教養とに裏打ちされ、世界的歴史観に立脚して物事を判断し思索できる人間を養育する場ではないのか。

「天正十二年上田城を構築した真田安房守以来の事績は脈々として上田の地に厳実顱偉の気概として受け継がれている。その城郭の地に母校を有する北信濃随一の名門上田高校の歴史はあの……。」

一体我々にとって「名門上田高校とは何なのか、そしてその中に共同生活を営む十手ガラスの一群は何を考え、何を求め、何の目的をもって行動しているのか。

現代社会の抱える様々なひずみや矛盾は色を変え、形を変えながらも、わが名門上田高校にも浸透している。進学率と、一流大学合格者の数でしか本校及び他校の優秀性を語れない教師。クラブをサボリ、掃除をサボリ、生徒会活動の義務を放棄してまで良い点数を取ろうとする生徒。高慢で無責任、多弁で小才はきくが、実行力に乏しく、排他的。一体これらのうちの何を取って「名門上田高校の伝統的気風」と言うのか。

今、病める上田高等学校は、本当に新しく脱皮するか、または従来通りの形式的権威主義のまま崩壊せんとするか、その分岐点に立っている。生徒会も教育体制もすべてが行きづまり、苦悩し、胎動している。それはちょうど、近代百年の封建的秩序によって維持、運営されてきた大学が今新しく生まれ変わらんとしているのとおなじである。

私は、わが愛すべき上田高等学校が真に新生するその第一歩は、社会にあの学歴偏重主義を生み出した形式的権威主義を捨て去る事だと思っている。

「名門を捨てる事によって「名門」が生まれるのである。

私は声を大にして「人格的人間、良き市民となるための人間味に溢れた教育を！」と叫びたい。

そして必ずその中から、新しい高校が、大学が、社会が、国家が生まれるはずである。私はそう信じる。

ある日

上田高校一年　沢山博史

朝、大屋発八時二分の汽車に乗る。今日もまたものすごく混んでいる。

汽車に乗るのがこんなに困難な事とは！　もう男も女もない。みんな野牛のように突進していく。五分間乗るともう上田駅、降りてから出口までがまた一苦労。人、人、人の列、やっと学校につく。するともう予鈴がなった。ちきしょう、どうしてこんなに忙がせるんだ！　急いで上ばきにはきかえて一時間目の授業教室39番めざしてとんでいく。

一時間目英語、みんなは「イヤ語」なんて呼んでいる。授業が始まるとみんな下を向いて小さくなっている。英語の先生は、特定の人にあてるので有名。そして、あせっている割には、ちっとも進まない。この先生の口癖は「女はとわい」である。経験者の談である。

一時間目は、マスマティックス。今日は宿題を全然やってないからサボリたい気持にかられる。数学の先生は、シャレてばかりいる。

三時間目はいよいよ体育。ほんとうにうれしい。今日はバスケットシュートがノン・ストップでゴールに入った瞬間は何とも言えない気持だ。数学も英語もみんな忘れてしまいそうだ。

昼休みは、本来ならば当然休息の時間で、ゆっくりしなくてはならないのだが、そんなことはしていられない。みんな午後の授業の下調べに懸命だ。英単語を調べているのが多い。家でやってくればとその時は思うのだが、家に帰れば眠くて眠くてそんなどころではない。

四・五時間目とそれぞれ50分の長き授業に耐え抜いて、やっと六時間目と思ったら、現国、アーアヤンナッチャッタ。現国の先生は独りで、授業を進めてくれるから助かるが一度当たったが最後しつこく質問される。授業も半ばになると、コックリコックリしている者もいる。幸福な連中だ！　あーあ俺も眠くなってきた。じゃあこのへんで休みなさい。

社団法人・上田高校同窓会「関東支部」のあゆみ

創刊号において支部の生立ちが、（二三）大森副支部長によって詳述された如く、ようやくに第一回大会開催えの機運が熟してきた。

（一）昭和三十三年四月二十三日第一回東京大会（当時東京大会と呼称）が九段会館において開催されたのである。出席二七三名、打って一丸となった大会は予想以上の大盛会であった。当時、会費も五百円也、交通地獄の声もなく都大路ものどかであった。しかしこの大会を開催するまでには非常な努力と度び重なる幹事会、小打合会が幾度となくひらかれた。第一回生であり恩師でもあられた小泉清見先生を御招待、初回であっただけにあの当時の感激はいまも強く心に残っている。毎年春季に開催すべきことが満場一致で決議され、校歌、凱歌の大合唱がくりかえされた、支部のあゆみが現実に一歩前進した姿でもあった。

（二）支部の事務所は当時（三一）宮坂三吉君の会社内におかれ、社員諸氏の絶大な御協力と宮坂君の奉仕的精神によって物心両面にわたりお世話になったことを特筆したい。

（三）第一代の支部長は（十）宮入清四郎、幹事は（七）清水菊三（十）田中辰之助（十四）稲垣征夫（十八）遠藤文介（十八）井出俊一（二一）島田次郎（二三）大森頼雄、（二八）深井深（三一）玉井康彦宮坂三吉、矢島五郎（三二）高見沢澄平（三三）村上悠紀雄（三六）菲沢嘉雄清水谷孝尚（三九）松岡仁太郎（四〇）吉田節生（四二）横山誠之助（五一）神津正夫　以上二十名であった。よくまとまり打合会後は田中、深井の大先輩に引員されて、大いに気勢を揚げたものである。

宮入支部長も心やさしい名医であり、洒脱な面あるよき先輩でもあった。高見沢君達後輩諸氏、何れもが献身的な努力と協力をおしまるかったことはいうまでもない。

行動を開始した幹事の団結も次第に強く結ばれていった。

（四）第一回大会后、反省会がひらかれ、種々の計画がたてられた。

「第一回東京支部大会・報告記」を小冊子にまとめさせられてようやく完結した苦心の想い出もある。

更には支部の名簿も作成しようと、（三一）宮坂三吉、矢島五郎（三九）松岡仁太郎の三名がその編集委員となった、この編集も宮坂松岡君等の努力があってこそ、為し遂げた努力の結晶だった。

（五）しかし緒についた支部の発足に大きな不幸が見舞った。

宮入支部長の長期御病伏、急変の報に馳せつけた幹事数名もついに面会叶はず、幽冥界を異にされた大先輩の葬儀に、ただ涙の参列であった、不幸は更に続き、幹事の中心推進力でもあった（二八）深井深先輩の急逝は、支部発展の歩みを止めた、その第一歩から苦渋を共にした先輩方の逝去は、今想うだに悲しき想い出である。盛大な葬儀に幹事一同は相誘うて参列した日が険に浮ぶ。

（六）第二回の大会もいつ開催されるかの日星つかぬまま、徒らに日月はすぎ二年間の空白を余儀なくされた。しかしその間において母校との連絡もしばしば行われ深長に幹事再編成の努力がなされていたのだった。

（七）昭和三十六年の秋中半、ここに新らたな新幹事編成の腹案が出来、次の各氏が第二回支部大会えの準備に邁進し始めたのだった。

顧問（八）勝俣稔、支部長（七）清水菊三、副支部長（十三）沓掛真（十四）稲垣征夫、幹事としは次の各氏が推せんされた。

（十）田中辰之助（十八）井出俊一（二一）島田次郎（二三）大森頼雄（二五）鳥海辰（二八）坂井実雄（二九）小見山栄一（三〇）峯村文人（三一）玉井康彦、宮坂三吉、矢島五郎（三二）高見沢澄平、中村礼三（三五）滝沢正（三六）清水谷孝尚、高遠弥六、菲沢嘉雄、深井安兒夫（三九）松岡仁太郎（四〇）吉田節生、小林郷司（四二）横山誠之助（四四）柳沢広（四七）小山邦朋（五一）太田幸男、石井紀生（五二）奥紀子、白浜千枝子（五三）小出武（五四）深町勝男（五四）藤沢一郎、以上三五名である。

二年有余の戈月を経て、この陣容が揃った、清水大先輩を二代支部長に迎え、就任の挨拶で支部長自らの提案によって勝俣氏を顧問にと議せられ満場一致賛成、新らたに顧問が誕生した。この幹事編成にあたって私も少しく母校や本部の御相談は受けたが、大先輩とはとても親しく口さえきけなかった。しかし既に長老の齢に達せられていた両先輩ではあられたが常に会合に遅れたことなく、開会前に必ずみえられてドンと構えておられた姿が、今も懐しく浮んでくる。壮者をしのぐファイトの先輩であり、次第に親しみを覚える偉い大先輩であった。このお二人りを相扶け幹事の団結も次第に結集してきたことは事実である。

明朗有能な士が多く集ったこともいなめない、特に五二期を代表して紅二点、奥君と白浜君は古き卒業生である我々にとっては、まことにタマケタ存在であった。しかも彼女たちは欠席なく、止むなく欠席の時はその理由を詳細に申送ってきた、幹事会も和やんだ空気の漂うたことは本当に有難かった。

（八）（三一）宮坂君が、支部発足前からの長き尽力に疲れ、今後の母校や本部との連絡の要めをやれと相談しかけてきた、多忙はお互さまだ、同期生であるだけに勝手なことを云々合つて、ラチがあかない、せめて通知だけは出してやろうと云つたことが今日の状態に追込まれた私の姿である、しかし重ねて加筆したいが、もし宮坂君が東京の中心地であるNHKの通りに会社を構えていてくれなかったら、母校や本部の連絡、幹事会や小打合会の発足当時の会合場所には大いに我々は困惑したことであろう、

本部から現事務局長の竹内敬太郎先生が上京されると必ず宮坂のところに寄るを例とした、そしてすぐ近くに大森副支部長（当時は幹事）が居られ、先輩としていろいろな御指導や御相談に、よく宮坂君と伺つたものである、ここに支部のあゆみを綴るにあたり同期生であるからではなく、支部発足時の宮坂や玉井の活躍が非常に大であつたことを記した勝手を許していただきたい。

（次号につづく）

（幹事長・矢島五郎記）

編集後記

編集委員長（28）坂井実雄

去る九月の幹事会で再び編集委員は残留ときまる。若手の諸君が真剣にとりくんでくれるので、私は大船にのった気持である。創刊号におとらぬこの出来栄え、委員の諸君に先づ御礼を申し上げたい。本当に御苦労さまでした。ありがとう。

各種の原稿を集めるための打合会、そしてそれが全部集められた。

寄稿者の皆様方には委員一同と共に心から深謝申し上げています。

恩師玉稿、特に小泉先生には御老体をおしての御寄稿に大先輩としても慈愛のお心がうかがわれ感激も一入でありました。松岡、奈雲両先生にも本当にありがとうございました。

母校校長先生始め僚友各校長先生、各同窓会の代表者の御寄稿にも内容の豊富さを得て感激しています。紙面の都合で第八回大会報告も短文に終り残念、会員諸氏の特別寄稿に味あり、また会員各位の寄稿の情熱に多謝。在校生三君の寄稿は始めての企画であり完璧されて感謝の至り。広告もよく集り御掲載の各位に厚くお礼申し上げます。

編集の終りて空の白みけり。

◎本号編集担当者

委員長（28）坂井実雄

委員（31）矢島五郎（36）花岡椿（36）神野勝男（48）小木曽誠（50）半田収一郎（51）村田寛（55）成沢祐介

会計（40）小林郷司（47）牧内操

信濃路の美酒
明峰盛
信州銘醸株式会社
丸子町長瀬
TEL 上田5－0046
取締役 工藤仁助（48回）

皆様のサロンです　お気軽にご利用下さい
結婚式・宴会・宿泊
地下酒寮 信濃路
おはづけ、ひたし豆、蜂の子等で地酒を楽しんでいただく望郷の酒場です
国際ホテル 八峰閣
取締役 横関嘉伸（39回）
お問合せは☎（982）1181番　豊島区南池袋2－15－10

極醸
信州味噌
山吹
信州味噌株式会社
本社・東京都新宿区下落合1－523
電話（951）1141
工場・長野県小諸市甲2905
電話小諸（2）0007